ワールドトラベラーズ

藤綺呉羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールドトラベラーズ

【Nコード】

N0802S

【作者名】

藤縞呉羽

【あらすじ】

とあるOLさんがありがちに神様の手違いで死んで、ありがちにチートな能力をもらって転生しました。

転生先で同じような境遇の相棒見つけて、自分の欲望のために一部原作破壊しようと企んでいます。

相棒もチートです。むしろ主人公よりチートです。

このお話には原作及び原作以外の作品の魔法・技術・人名が、一部転載されております。

なお、こちらの連載は自身のサイトにも掲載しております。

転生しました

七夜が目を開けた時、彼女の目の前で二人の少女が土下座していた。

「……一体何事ですか？」

『申し訳ありませんでしたー！ー！ー！』

明らかに年下、それも十歳前後と思える少女たちの土下座と謝罪に七夜は困惑する。

『実はですね、私達地球担当の神なのですが』

『ほんのちょっとした手違いで貴方を死なせてしまったんです』

『本当なら寿命もまだまだあつて人生謳歌出来る筈だったんです』

『私たちのポカミスで……』

交互に言葉を繰り返す少女たち。彼女たちの言葉を、七夜は脳内で再生して整理していく。

「えーと、つまり私は今現在死んでいると」

『はい』

「しかも、本当は死ぬはずじゃなかったと」

『はい』

しばしの沈黙。

「来週ライブあるのに—————!!」

うがーっ、と叫ぶ七夜に神と名乗る少女たちは再度「申し訳ありませんでした—————!!」と謝罪を繰り返す。

『うつつ、ですから貴方には出来る限りの優良物件での転生をさせていただきますっ』

『蘇生は出来ないのです、転生しかありません。でもでもお好きな世界に転生出来ますからっ!!』

「……………転生しても彼らはいない……………」

遠い目をして七夜はたそがれる。

目下、七夜の最大の楽しみは次の週に行われるアイドルグループのコンサートだった。デビュー前から追っかけてのめりこみ、趣味の活動を行うほど嵌っていた。

「もう二度と彼らの歌は聞けないのかぁ……………」

『ごめんなさい……………』

はあ、と大きくため息をついてから七夜は少女たちに向き直る。

「ま、死んだもんはしょうがない。それで、転生する際に融通は利かせてくれるらしいけど、どこまでOKなの？」

『はいっ。美人で金持ちのお嬢様でもOKですっ』

『なんだったらマンガやアニメの世界でも』

「マジでか。それ乗った！ 多重トリップは可能？」

『そういう体質にするのであれば可能です』

『今なら特殊能力もおつけします』

少女たちの答えに、七夜は満足そうな笑みを浮かべて条件を並べる。

「なら、まずは真祖の吸血鬼の肉体と空想具現能力、それから直死の魔眼、妖精眼も魅力的だけど……それは外しておこう。あとは能力名・一方通行で」

『……チートですね』

「それだけあれば死なないだろうし、危険は回避出来る」

『わかりました。真祖の吸血鬼の肉体と空想具現能力、直死の魔眼、能力名・一方通行。以上の特殊能力でよろしいですか？』

「うん。あ、吸血衝動は外しておいてください。容姿も付加OK？」

『はい』

「じゃあ……」

七夜は髪色と目の色、そして持つべき肉体のイメージとなるキャラクターを告げる。

『承知しました。他にはよろしいですか？ 金銭面も付加出来ませよ』

「いや、お金は自分で稼がないとありがたみがわからなくなるし」

『そうですか。でしたら転生先の世界はどうしますか？』

『貴方に付加した能力を生かせる世界ですと……こちらの世界はいかがでしょう？』

少女が差し出した一枚の紙にはこう書かれていた。

【魔法先生ネギま！】

その下に、さらに詳細な転生先のデータと転生後の七夜のデータが書かれている。

「あ、ここ修正で」

七夜は指さした個所の修正をお願いする。少女は七夜の条件に頷いて書き換える。それからいくつか問答を繰り返し、最終的に出来あがった転生条件の紙を少女の一人が何かの機械と思しきものに入れる。

『……転生、受理されました』

合成音が耳に届いたと思うと、次第に七夜の体が透けて行く。

『それでは』

『来世をお楽しみくださいませ』

優雅に頭を下げて、笑顔で見送る少女たちに七夜は手を振り、ゆつくりと目を閉じた。

ゆらゆらと揺らめいていた意識が覚醒していく。瞼を開くと、白いカーテンが風で揺れていた。

上半身を起こすと、視界に入るのは桜黄金の髪。端に立てかけてある姿見を見ると、目の色が紫であることがわかる。

「おお、本当に歌姫さんの色だ」

髪の毛を指の間に滑らせながら、七夜は立ちあがって窓の方へと歩いて行く。窓から見える光景はのどかな田園風景で、さしずめ雰囲気はイギリスの片田舎といったところか。そして彼女がいる場所は、窓から外観を眺める限りでは小さめのカントリーハウス。それでも一人で暮らすには大きすぎるくらいだった。

「ふむ。やっぱりイギリスかな、ここは」

ぺたぺたとサンダルをはいて館内を歩き回る。しかし誰もいない。

「もしかして自炊？ いや、慣れてるけどさ」

リビングと思われる所に辿り着くと、テーブルの上には一枚の紙と厚めの本が置いてある。

「なになに……」『転生おめでとございます。貴方様が提示された条件に乗っ取って新たなお名前をご用意いたしました。是非お使いください。一緒に置いてある本はこの世界での魔法理論になりますのでご利用ください。なお、貴方様の生前の記憶に基づいて最も印象の強い魔法理論を予めセットアップしておきました』……サービスイいな、おい。で、名前はっ」と

紙の下半分のほうにでかでかと名前が書いてあった。そして予め使用可能な魔法の一覧。

朱月七夜、と。

「名前は前のまんま、か。そのほうが楽っちゃ楽だけど、名字はある意味あからさまだなあ……」なによりもこの魔法一覧。チート中のチートじゃない、私」

紙を丁寧に折りたたみ、魔法理論の本の最後に挟み込む。中に軽く目を通せば、見たこともない言語で書かれているにも関わらず、七夜には全て理解できた。

「これもオプシヨン？　どんだけサービスいいんだろう、神様って
じっくりと読み深めるために、もう一度最初の寝室へと足を向け、
太陽が沈むまで七夜は理論書を読み続けるのだった。」

七夜が転生して200年弱。彼女の館の周辺もだいぶ様変わりしてきていた。

最初は田園風景だけが存在し、少々歩いた所にある村に買い出しに行っていたのだが、村から街へ、街から小国へと発展し七夜の館とは別に城が街の中央に経っていた。

国の長である王と七夜の関係は至って友好で。

彼女が吸血鬼と知りながらも、村であった時代から交友を続け、外敵から村を守って来たこともあったのが原因だ。

村長が領主へ、領主が王へと名前を変えても、祖先が受けた礼は忘れない。

七夜もそんな王家に敬意を表し、未だに街を狙う獣や肥沃な大地を狙う近隣諸国から国を守っていた。ここ最近では七夜の存在と力が功を奏し、この国を狙う者はほとんどいない。

「ナナヤ様、今年は葡萄の出来がとてもよろしいので後で出来あがったワインを持っていきますね」

「ありがとう。待ってるわ」

「ナナヤ様ー、ちょうどパンが焼き上がったんです。お一ついかがですか」

「美味しそうっ」

買い出しに市場まで来ると様々な人から声をかけられる。七夜は一つ一つに返事を返し、もらえるものはしっかりともらう。

最終的には買い出しに来たはずなのに、財布からお金が消えることなく食材がその手にあるという状態。

「またいっぱいもらってしまったわ」

小さく息を吐きながら、七夜は持っていた食材をすべて四次元空間が広がっているウエストポーチに収納する。2000年の間に彼女が空想具現化能力で生み出したものの一つだ。

全てを仕舞い終わると、足取りも軽やかに中央に位置する城へと足を向ける。すでに門番とも顔見知りな七夜はフリーパスで通り抜けられた。

廊下を通り過ぎる七夜にメイド達が頭を下げ、城仕えをしている兵士たちや文官武官たちも頭を下げていく。

「今日も問題は特になさそうね」

口元に笑みを浮かべながら、目的地である城の最奥。王族のプライベートエリアへと足を踏み入れた。

「ナナヤ様」

「オスカー」

後ろに撫でつけ、太陽光できらきらと輝く見事な金髪を持つ彼は現国王である人物だった。

「本日もご機嫌麗しく、また相変わらずお綺麗で」

「褒めたって何も出ないわよ。それに、ナナリーのほうが可愛くて綺麗よ」

「ナナヤ様……」

オスカーの隣に座る末の王女は頬を染めて七夜を見上げる。七夜の名前からもじってつけられたナナリーのいう名前が、末の王女にとって誇りであると聞いた時七夜はあまりの喜びに彼女を抱きしめたほど。それ以来、殊の外末の王女を可愛がっていた。

「ジュリアもアネットもどこに出してもおかしくはないレディに育つて……私の後について回っていたのが嘘のよう」

「ありがとうございます、ナナヤ様」

「ナナヤ様、ジュリアお姉さまは結婚が決まったんですよ」

「まあ！ 本当なの、ジュリア」

「は、はい……」

ナナリー以上に頬を赤らめるジュリアに、七夜は頬を緩ませて彼女の手を握り締める。

「幸せになってね、ジュリア。私はいつまでも貴方達の幸せを祈ってるわ」

微笑む七夜にジュリアも笑みを返す。

「それで、本日はどうなさったのですか七夜様。我々に何か用があったのでは？」

「あ、そうそう。実は、しばらくこの国を離れようと思って」

『ええっ！？』

「東の方に新しいお菓子が出来たらしいの。是非それを食べてみてく……」

握り拳で語る七夜。

生前から七夜は甘党だ。甘党で酒好きの肩書が彼女にはついている。

すでに200年の間に国内や近隣諸国の甘味は食べつくしているので、そろそろ新たな甘味を発掘しようと思っていた矢先に、ここからかなり離れている東の国に新たな甘味が出来たと聞いた七夜は、

どうしてもそこへ行きたかった。そして行くことを決めた。

「そうですか……ナナヤ様らしいといったらそうなのですが。いつから行かれるおつもりで？」

「ん？ 今からだけど？」

「……………お気をつけて行ってらっしゃいませ」

もう何も言うまい、と言った感じのオスカーにナナヤはにんまりと笑って「お土産買ってくるから」と言いつつ、子供に対してするように頭を撫でた。

三姉妹にも声をかけ、遅れてやってきた王妃にも声をかけてから七夜は国を旅立った。

だが、七夜は知らない。

彼らとの会話がこれで最後になることを……

転生しました（後書き）

思いつきを思いのまま投稿してみました。
少しでも暇つぶしになればいいかと。

相棒と出会いました

少ない噂だけを頼りに旅すること数年。七夜は今までいた世界ではなく、魔法世界といわれる世界に来ていた。

「そりゃ広まらないわけだわ……魔法世界のお菓子じゃねえ」

【北の連合】と呼ばれる地域の一部の存在する村に職人がいる。それを七夜は魔法使いから聞いたのだ。

七夜は同族とある一定以上の魔力を持った人間以外には、自らの正体がばれないようにしている。旧世界と呼ばれる今まで七夜がいた世界には、七夜の正体がわかるほどの魔力量を持った魔法使いは存在していなかった。七夜に菓子職人のことを教えた魔法使いも、七夜を魔法関係者の人間としか思っていなかったはずだ。

「確かこのあたりだったと思っただけ……」

地図と周囲の様子とを比べながら見回す。ほとんど人のいない森の奥。そこで、人より何倍もいい聴覚に荷物を落としたような聞こえて来た。そちらへ目を向けて、七夜は固まった。

「……Why?」

思わず英語が出てきてしまうほど。だが、それは彼女だけでなく、目の前で同じように同世代の青年も固まっている。

「なんで銀河の妖精が……」

「っ!?! ちよつと貴方! 今何て言った!?! 銀河の妖精? そ
う言っただわよね!」

「ちよつ、く、首」

胸元を掴みあげたことで青年の首が締まっているが、七夜は手加減しない。

「この顔を知っているってことは、あんた…… 21世紀の人?」

小さく問いかけると共に、七夜は青年から手を離す。青年は咳き込みながら呼吸を整えて七夜へと向き直った。

「どうやら同郷みてえだな。それも同じ時間軸に生きてたってばいし、オタクと見た」

「この顔知ってるあんたも十分オタク要素ありよ」

「違うない」

「あとは、何でその顔なのか私も知りたいわ」

「あー…… お前ファンだったりする?」

「筋金入りのね」

「悪い。けど、俺はそこそこファンなんだ」

「そう…… ねえ、よかつたら少し話さない? 初めて見つけたお仲

間だもの、仲良くしたいわ」

「いいぜ。そこに俺の家があるから行くか」

青年に誘われて、七夜は彼の後ろを着いて行く。小さくも大きくもない家に入ると、中から懐かしい香りがした。

「こ、これは……」

「懐かしいだろ、醤油の香り。醤油と煎餅作つたらかなり評判良くてさー」

「ああっ！ じゃあ新しいお菓子を作り出した菓子職人てあんたなのね！？ 旧世界で噂を聞いて私来たんだけど……まさか日本人だつたなんて」

「俺も驚いた。転生者がいることはわかってたけど、まさか同郷だとは。識ろつとは思わなかつたし」

「……どういう意味？」

青年はにっ、と笑いながら棚から取り出したものを七夜の前に置いた。

磁器で出来た日本茶・玉露を楽しむ時に使われる宝瓶と宝瓶用の茶杯。そして木製の茶托。

「日本茶万歳」

じつくりと手間をかけて入れられたお茶は七夜の乾いた喉を潤す

と同時に、遠くかけ離れてしまった生前の記憶を蘇らせる。

「緑茶と米が美味しいって思うのは日本人の性よね」

「同感だ……そついやお前の名前聞いてなかったな」

「七夜。朱月七夜よ。朱色の月に、漢数字の七と夜」

「……型月？」

「それも知ってるなんて、本当に同種の人間みたいね。でも名字は神様がつけもので、私はつけたわけじゃないわ。名前は生前から七夜よ。で、あんたの名前は？」

「空牙、神威空牙。ちなみにこの名前はお前同様、死んだ後に付けられたもので、俺が付けたわけじゃねえから」

「空牙、ね。あんたも転生したんならなんか特殊能力とか持ってるの？ チート？」

「お前は？」

「チート。一度はオタクなら夢見る厨二病よ」

七夜の言葉に、空牙はがくつとついていた手から顔を滑らす。

「開き直ってんなー……ま、俺も人の事言えねえけど。ただ、俺の場合普通のチートよりチートだと思うぜ？ 何せ、某魔王と同じだし」

「某魔王じゃわかんないわよ」

「生前の年齢による。俺、三十路前だったけど」

「私も悲しい三十路前だったわよ」

「じゃ、わかるか。俺の能力はL様と一緒に」

「……L様？ 某小説のあとがきでよく活躍してるあのL様？」

「おおー、さすが同世代」

「……チートすぎでしょ、それ。何がどうなってそうなった？」

「いろいろあつたんだよ、マジで……」

空牙がこの世界に転生して来る経緯は、七夜にも予想もつかないものだった。

七夜と違って、空牙が死んだのは手違いなどではなく、本当にあらかじめ決められていたことだった。だが、死んだ空牙が最初に聞かされたことは死後についても、輪廻転生についてももなく、彼の前世、さらに前前世と過去世についてだった。

何代か前の空牙の魂が輪廻の輪に乗る際に、自らの持つ幸運値を代償にして、何代か後の魂が最大の幸福を送れるように交渉したというのだ。そこから空牙の魂は生まれ変わる度に幸運値を溜めて行く人生を送っていた。

「それ聞いたら俺の不運の人生はそのせいかって思ったしな……マ

ジでリストラしなかつただけ有難かつた……」

「リストラはきついよ、リストラは」

「ああ……それで神様曰く、本当なら最大の幸福人生を送るのは俺だつたんだと」

「……は？」

「一番最初に幸運を渡した時の担当者が、そのまま俺の幸運値を見てたらしいんだけど、前の前の俺が死んだ時なんでか席を外してたらしい」

1000回分の幸運を溜めることで果たされるはずだったのだが、担当者がその場から席をしばらく外してしまつた間に空牙の前前世の魂が死に、転生した。本来ならそこで担当者が申し出れば生前の空牙が最高の幸福を手に入れるはずだった。だが、それを手に入れることなく転生し、生前の空牙は運命に乗っ取って亡くなった。

このことで、溜めていた幸福値はメーター超えたあげくにオーバーヒート。結果、溜めた分の幸福値は純粋な霊力として変換され、空牙の魂は昇格に昇格を重ね、結果的に混沌の主、創造主、唯一神などと呼ばれる存在と同格になつてしまつたのだ。

1000代分の魂の幸運値の凄まじさを知つた天界の上層部は、今頃七転八倒しているらしいとは空牙の談。

「今んとこ、俺以外にそんなことした奴いないからこれからはもうしないってさ」

「さすがに混沌の主と同じような奴他に作りたくないでしょうよ…」

「俺にそれを告げた奴も、すげえ顔蒼かったしふらふらしてた。生前の俺が死んだ時点でオーバーヒートしちゃまった瞬間、魂の格が一気に上昇して天界の一部が吹っ飛んだらしいから」

沈黙が下りる中、ずずっ、とお茶を啜る音だけがその場に響く。

「……まあ、いいや」

「いいのかよ」

「だって私には関係ないもの。ただ、同じような境遇の人間が見つかって嬉しいだけよ」

「俺も嬉しいよ。どうせなら長い付き合いしたいもんな」

「ええ」

しばし和やかな雰囲気は室内に漂う。

「……ねえ、空牙。空牙が創造主なら、この世界は空牙が創ったってことになるのかしら？」

七夜の問いに空牙は首を振る。

突発的に混沌となった空牙には、いきなり世界創造では荷が重いという天界側の配慮により、すでにあったいくつかの世界の管理・統括権を譲渡してもらい、世界が再び混沌に還るまで見届ける役目

を担ったと空牙は語る。

「譲渡してもらった世界が終わったら、俺は自分で世界を創ることになってる」

「世界が終わるまで、って随分長い勉強期間なのね」

「時間が無限にあるからな。それくらいがちょうどいい」

「ならそんな管理者さんに質問。私、いくつかこの世界で原作破壊をしようかと考えてるんだけど、それはダメかしら」

「物によるな。世界維持に必要な人物を殺したり、事象を歪めることは後々俺が面倒だからやめてくれ」

むっ、と手を顎に当てながら七夜は考える。少なくとも、原作登場人物を殺すことはしないし、そこまでひどい事象の歪め方でもはいはずだと彼女は思う。

「手元にエヴァンジェリンを引き取ることに、主人公のネギを弟子にするのは可能？」

「可能だな。少なくとも、原作の流れをある程度歪めなければいいんだ。お前がネギを手元に置くだけなら、性格改変はあっても大まかな流れは変わらない。細かい部分で変化は出るだろうが」

「その細かな部分が積もり積もって流れが変化することは？」

「その時は俺が修正する。他には？」

「アスナを記憶保持のまま手元に置くことは？」

「……難しいな。あの子は記憶の有無で行動が変わる。記憶保持のまま性格改変のネギと共にあることは好ましいが、その後の流れが予想つかねえ。大体、お前そこまでして何を望んでだよ」

「私はね、逆ハーレムとかそういうのが苦手なの。ナンバーワンよりオンリーワンなのよ」

「そういうことか。つっても、ネギまは逆ハーレムの話だろ」

「嫌よ。私が来たからにはオンリーワンにさせてもらうわ。目指すはネギとアスナの恋愛に近い家族愛よ。固定カップ万歳！」

「その言い方……お前、まさか腐ってる女子？」

「Yes！ BLはファンタジーよ！」

「……好きにしてくれ」

がくつと肩を落とす空牙に、七夜は「うふふ」と誰が見ても可愛らしく笑った。

同じ境遇とオタク属性から、細かい趣向は違えど大まかな所で気

の合った七夜と空牙。二人はそれから行動を共にしていた。

周囲から見れば美男美女のカップルとして目を惹いていたが、本人たちにしてみれば親友兼相棒といったところか。

「空牙、私そろそろ一回館に帰ろうと思ってるんだけど」

「館あ？」

「うん。神様に最初にもらった家なんだけどねー。周囲に田園と小さな村しかなかったのに、今じゃ国よ国。その王族と仲良くしてて、ちよつと旅に出てくるって言いながらも十年は経ってるから、そろそろ戻らないと……」

「いいぜ、付き合う。ある意味、こっちに来てからのお前の原点なんだろ？」

「ええ」

「じゃ、行くか」

気軽にまるでそこらに散歩に行くかのように空牙は言う。四次元に物を収納する術を習得している彼らにとって荷物などあってないもの。

空牙が住んでいた家も彼が魔法で造り出していたものなので、彼の意味一つで消えて行く。

そこにはまるで最初から何もなかったかのように森の静寂と木々が広がっていた。

妹が来ました

そこには何もなかった。

活気あふれる市場も、聞こえるはずの人の声も。あつたはずの城も。長年過ごした館もすべて消えていた。

「どう、いつことなの……」

あるのは瓦礫の山のみ。

「なぜ!？」

「……七夜」

「私が、私がこの国を離れなければ……!」

両手で顔を覆って泣き崩れる七夜に空牙は何も言えないでいた。彼の目から見て、彼女の祖国ともいえる場所を語るときの表情は優しく、彼女がどれだけその場所を愛していたかここに来るまでの道中で強いほど感じていた。

やろうと思えば一瞬で来れた行程をあえて人間のよう旅をしながら来たのは、互いの事をもっと知るべきだと考えたから。

しかし、今はそれを後悔していた。

周囲を見回していた空牙はある気配に気付く。

「七夜、留まり続ける魂の気配がするぞ」

「えっ……」

空牙は手を一振りすると、黒い大地からふわふわと靄のようなものが出てくる。靄は徐々に形を為し、一人の男の姿を取っていた。

「オスカー……！」

『ナナヤ様』

「私は、私は……」

『ナナヤ様のせいではございません。全ては我らの力がふがいないせいにございます』

「違うわっ。私がこの国を離れなければこんなことにはならなかった！」

『いいえ。これは罰にございます。すべてをナナヤ様に頼り切っていた我が国への罰なのですよ』

「オスカー……」

『ナナヤ様。ふがない王の最期の頼みを聞いていただけないでしょうか？』

「勿論よ。私に出来ることであればなんでもするわ」

『どうか、どうかナナリーを見つけてくださいませ。あの子を信頼』

のおかげで従者と逃がしました。あの子だけなのです、逃がすことが出来たのは……どうか、どうかお願いいたします……！」

「我が友オスカー・シデス・ランデイン。朱月七夜の名にかけて、必ずナナリー・アタナシア・ランデインは見つけます」

『ありがとうございます……！』

その言葉を最後に、オスカーの姿はゆっくりと消えて行く。七夜はそれをじっと見届け、溢れている涙を手でぬぐい、旋律を紡いだ。

優しく、そしてどこまでも柔らかい。

ただ、安息と鎮魂を願うその歌を空牙は心地よく聞いていた。

歌が終わると、七夜は何か決意したような顔で空牙を見てくる。

「なんだ？」

「お願いがあるの。この国を滅ぼした奴らを教えて」

「殺す気か？」

「直接手出しはしないわ。ただ、悪夢をあげるだけよ。真祖の吸血鬼に相応しい、血で染められた悪夢を」

口元だけに艶やかな笑みを浮かべて言う七夜の姿を、空牙は素直に綺麗だと思う。

今ここで本当に真祖としての朱月七夜が生まれたのだと確信した。

以後、七夜は襲い来る敵を圧倒的な力で殲滅し、より強力な呪いとして悪夢をプレゼントし続けた。

空牙もそんな彼女を手伝い、いつのころからか、七夜は【染血のブラッディナイトメア】
悪夢【闇の女王】などの肩書が与えられ、空牙も【古の災厄】
トランセンダー
超越者】などと呼ばれるようになる。

漆黒の闇の中を駆け抜ける二つの人影があつた。普通の人間には見えないほどの速度で走り抜けるその人影は、互いに叫びあいながらも駆け抜けて行く。

「ああもつつ！ 空牙がさつさとナナリーの情報探れば時間かかんかったのにっ！」

「つつせ！」

新米創造主である空牙は、世界の管理・統括権を譲渡されただけで創造したわけではないので、世界の全ての情報が彼の内側に存在していない。彼が識ろうとしなければ知識として認識しないのだ。

「ってか、何で私達呑気に走ってんの……？」

「そりゃ……あ」

「転移よ、転移。空牙、ナナリーの元まで空間転移して」

七夜の言葉に頷き、彼女の体を抱きしめて空牙は空間を飛んだ。着いた先では一人の幼い少女が呆然と天井を見つめており、少女の前に親と思しき男女が血に濡れて倒れていた。

「ナナリー！」

倒れている女性の顔は、年月は経っても七夜の中で可愛がっていた末の王女の面影を残していた。

「完全に事切れている……七夜、この子たぶんナナリー王女の子供だ」

「わかってる。空牙、この子の顔見覚えあるでしょ？」

「は？ ええと……マジ？」

じつと少女の顔を見つめる空牙に七夜は苦笑する。

「空牙、悪いんだけどナナリーとその旦那様を輪廻に乗せてもらっていい？」

「任せておけ」

空牙の手から白い光が溢れ、光が収まった時夫婦の体は消えており、周囲に漂っていた血臭も消えていた。

七夜はそれらを満足そうに見届けてから少女の体を抱き上げ、部屋の隅に座りこむ。

「……お嬢ちゃん、名前を聞いてもいいかしら？」

「……エヴァ……エヴァンジェリン・キャスリン・マクダウエル」

「そう。エヴァンジェリンと言うのね。私は七夜、朱月七夜よ。あつちが相棒の神威空牙」

「なな、や……？ お母様が、言っていたナナヤ様……？」

「ナナリーが私の事を？」

「うん……とても素敵なレディで、誇り高い吸血鬼だって……ずっとお母様とお母様の国を守ってくださっていた方だって」

「そんな大層なものではないわ。肝心な時に私はナナリー達を守れなかったのだから」

悔恨から目を伏せるが、すぐに七夜は視線をあげエヴァンジェリンと視線を合わせる。彼女から何があったのかを聞き、そしてこれからのことを告げた。

エヴァンジェリンの体が真祖の吸血鬼になったこと。七夜の同族であること。

そして、七夜達の家族になってくれる意志はあるかということ。

「家族？」

「ええ。悲しいけれど、エヴァンジェリンのお母様もお父様も死ん

でしまっている。それはわかるわね」

「うん……」

「私はナナリーの娘である貴方を一人にはしたくないの。だから私と空牙の妹になってほしい」

「お前の親はナナリー王女達だからな。だから、俺達はお前の兄と姉だ。俺たちも不老不死だから、ずっと一緒にいられるぞ？」

「本当に……？ 私を置いて行かない？ 一人にしないでくれる？」

『勿論』

「うれしい……なりたい。姉様と兄様の妹になる。家族になるっ」

「ああ、もつ可愛いつー！」

ぎゅっとエヴァンジェリンの小さな体を七夜は抱きしめる。ぱちぱちと目を瞬くが、すぐに嬉しそうな笑みを浮かべて、エヴァンジェリンは小さな手を七夜の背中に回した。

「じゃ、これからエヴァンジェリンの名前はエヴェンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウェルだな」

「ナナリーのミドルネームとこの子自身のミドルネームの愛称を合成。いいアイデアよ、空牙」

「おほめにあずかり光栄です、女王様」

「その呼び方やめて」

近くにあった本を空牙に向けて投げつけるが、簡単に避けられてしまい舌打ちする。

「んー……エヴァでもいいけど、せつかく家族になつたんだから私たちはエヴァのことキティって呼ぶわ。私達が呼ぶ特別な名前よ」

「うん」

「キティ、幼い私の同胞。これから家族としてよろしくね」

「キティ、幼き真祖。これから家族としてよろしくな」

「はいっ、ナナヤ姉様、クーガ兄様！」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

こうして、後に【ダーク・エヴァンジェル闇の福音】と呼ばれる少女が転生者二人の家族となるのだった。

妹が出来ました(後書き)

二つ名にルビを振っていないのは、カタカナにするとなんとなく微妙な気分になるからです。

でも振ったほうがいいかな？厨二的な感じになるでしょうか……

04/12修正 ルビ振ってみた。

妹が旅立ちました

可愛らしい「ええいっ」という掛け声と共に、空牙の上にエヴァンジェリンの体が載せられ、彼は「ぐはっ」と蛙の潰れたような声をあげた。

「兄様、朝よ？」

「キ、キティ……起こすならもう少し可愛らしく起こしてくれ……」

「だって姉様がこうしなさいって」

「七夜の奴……！」

くりくりと大きな目を瞬かせて、エヴァンジェリンは言い放つ。

空牙にはロリの趣味はないが、可愛いものは可愛い。

一つため息をついてから、指先を鳴らして服装を寝間着から普段着へと変化させる。

エヴァンジェリンを引き取ってから二百年。元々の才能か、真祖として目覚めたことによる覚醒か。彼女の魔法の習得度は半端ではなく、こと氷系に関しては上級魔法を使えるほど。そのせいもあり、すでにエヴァンジェリンは自分を真祖化した相手に対して復讐を遂げている。

空牙は魔法よりも日本人ゆえか、刀を使う方が好みで。簡単な剣の扱いをエヴァンジェリンに教えていた。

「兄様、私はどうしてもその魔法使えないの？」

「これは一種の適性がないと難しいな。あの七夜でも使えない」

言いながらベッドから立ち上がろうとすれば、エヴァンジェリンが小さな手を彼の方に伸ばしている。その意を汲み取った空牙は頬を緩ませながら、エヴァンジェリンの小さな体を抱き上げた。

「落ちるなよ」

「うん」

ぎゅっ、と空牙の首に腕を回しながら高くなった視界を楽しんでいる。

空牙の身長はモデルにしたアイドルよりも10センチほど高い。これは生前の空牙が成人男子にしては小さめだったことに起因している。

「今度は七夜に抱っこしてもらえ」

「姉様よりも兄様のほうが高いわ」

「そりゃそつだ」

七夜の身長は170センチ程度。これは生前の七夜と変わらないと言っのだから、空牙は聞いた時少し泣きそうになった。

「キティは本当に空牙の抱っこが好きなのね」

リビングへのドアを開ければ、優雅に紅茶を飲んでいた七夜が二人に視線を向けてそう言った。

「姉様、兄様起こしてきたよ」

「ありがとう、キティ」

エヴァンジェリンを床に下ろし、コーヒーサイフォンをセットする。本来時代的にありえないものだが、そこは創造主クオリティ。他世界からいろいろ引っ張って来たのだ。

「よくコーヒーをブラックで飲めるわよねー……」

「俺に言わせりゃ、お前のその砂糖の入れっぷりのほうが異常だ」

二杯目の紅茶を注ぎ、入れ物から角砂糖を三つ落としていく光景に空牙は眉を顰めた。どちらかというと空牙は甘いものが苦手で、精々煎餅あたりが限度。ただしザラメはなし。

「甘くて美味しいのに」

「限度があんだろ、限度が。キティ、オレンジとアップルがあるけどどっちにする？」

「んー……アップル！」

エヴァンジェリンの答えに口元を緩めて、冷蔵庫からアップルジュースを取り出しグラスに注いだ。

「キティー」

「なあに、姉様」

「一つ考えていることがあるのだけれど」

「んん？」

「キティ、修行の旅に出る気はない？」

ぶはっ、と空牙はコーヒーを噴き出した。

「空牙汚い」

「お前、何考えてるんだっ」

「少し前から考えていたことよ。キティはほとんど人間と接してないでしょ？ だからここらで普通の人間との付き合い方も覚えてもらおうかと思つて」

「だからつていきなり修行の旅はねえだろ」

「姉様、私を捨てるの……？」

目じりに涙をためるエヴァンジェリンに七夜は目を瞞つて彼女の小さな体を抱きしめる。

「捨てるわけじゃないでしょう。キティは私の妹で大事な家族なのだから。でもね、外に出て他の物たちと接することも自己の成長には必要なことなの」

狭い世界でしか生活していると、狭い視界しか持てなくなる。それは七夜と空牙の望むことではない。

「確かにそりやそうだが、キティにはまだ早くないか？ 大体、馬鹿な奴らがキティを傷つけたらどうするんだ。外じゃ魔女狩りとかやってんだぞ？」

元々三人が人里離れた森の中で暮らしているのも、世間がいろいろと騒がしくなってきたからだだった。

誰が定めたかわらない普通の定義に外れた者を【異端】と決めつけて、火あぶりにすることで神に許されるなどと、勝手なことを繰り返している世の中を空牙も七夜も厭っている。

「あんたの常識、みんなの非常識って知らないのかしらね」

「外の奴らに言わせら、俺らが非常識に当たるんじゃないかね？」

「そうかもしれないわね。もちろん、それも踏まえてキティには外に出てほしいの。キティに、キティなりの生き方をしてほしいのよ」

「……確かに今のままじゃキティの全部が俺らで染まっちゃうもんな」

「ええ」

真祖化されてからのエヴァンジェリンの世界は七夜と空牙で終わっていた。力の扱い方も生きる術もすべて二人で教えていた。

だからこそ、危うい。

それを空牙も薄々は感じていた。

「キティ、俺らは家族だ。それはわかるな」

エヴァンジェリンの首が縦に動く。

「だから俺らはお前を裏切らない。お前が本当につらくなったら絶対に助けてやる」

「兄様……」

「そつよ、キティ。旅に出てる間はほんの少しだけのお別れよ。私達は長い時を生きるのだから」

「姉様……」

「旅に出なさい。そして世界を知りなさい、エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル」

「……はいっ」

七夜に真っ直ぐに見つめられて、エヴァンジェリンは決意した瞳で頷いた。

旅立ちの朝、エヴァンジェリンは不安そうな面持ちで屋敷の玄関に立っていた。すると最愛の姉が一つのペンダントを彼女に渡す。

「これは、ここにいつでも帰ってこれる転移魔法が入ってるわ。本当にもうダメと思った時、これを使って帰ってらっしゃい」

「馬鹿な奴らにこいつを取られそうになった時にも発動すつから」

どこまでも優しく強い姉と兄に、エヴァンジェリンの心は凧いで行く。それまで抱えていた不安がゆっくりと消え、旅に出ると決めた時の強い思いが蘇る。

大事な二人の家族と肩を並べられるようになりたい。

誇り高く気高い、同じ真祖の吸血鬼たる姉の横に。

誰よりも強く逞しい、混沌の主たる兄の横に。

それを達することが出来るのならば、自分はどんな汚名も被ろう。全てはもう一度二人の横に並ぶために。

「姉様、兄様、行ってきます」

「行ってらっしゃい」「」

金と紫の瞳に見送られ、エヴァンジェリンは屋敷の結界から外へと足を踏み出すのだった。

妹が旅立ちました（後書き）

今回は若干短めです。

そしてPVが1000を超えました。本当にありがとうございます！
これからもローすぎるペースですが、がんばっていきます。

少年が来ました

ふるり、と長い睫毛が揺れて男はゆっくりと瞼を開けた。

少し温かい吐息が首筋に吹きかかるのを感じると同時に、足に何かが絡みつく感触を覚えた。

「……………」

視線を下にずらすと、桜黄金の髪と雪のような白磁の肌が見えた。

「あ……………」

眠る彼女を起こさないように、枕にしていた腕をそっと引き抜く。僅かに身じろぐのを感じて、しばし固まるが彼女が目を覚ますことはなくほっとする。

上半身を起こしサイドテーブルの時計に視線をやると、すでに時計の針は8時を回っており窓の外から小鳥の囀りと太陽の光が差し込んでいる。

痺れる腕をほぐし、軽く伸びをして服を着替えた。

「……………混沌の力って便利だ」

混沌の主として世界の管理・統括権を得てから、彼は持ちえる世界に存在する“モノ”であれば使用することが出来た。だが、基本的に空牙が使っているのは生前の世界のものが多く、今横で眠る彼

女も同じようなものだ。

「どうすっかなー……」

「何が？」

「……起きてたのかよ」

「あんたがぶつぶつ言ってるからね……あとは、なんとなく起きた
心配がしたから」

位置的に上目づかいで見ってくる七夜を見下ろすと、彼女の口元が
にんまりとする。

「いかがでした？」

「……ごちそうさまでした」

そんなことを言われれば、そう返すしかない。

「つーか、お前よかったの俺で」

「顔と体は好みなので」

「あー、なるほど」

別に空牙と七夜の間恋愛感情があっただろうことになったわけ
ではない。ただ、なんとなくそんな雰囲気になっただけだ。

すでに二人で共に過ごすようになって六百年弱。それだけ一緒に

いれば情も湧くし、空牙の中では彼女が最優先される存在になっていることは間違いない。だが、そこに恋愛感情があると問われれば否定する。それは七夜も同じだと空牙は思っている。

恋愛なんて言葉では括れない、自分の半身のような存在。

それが空牙にとっての七夜だ。

「空牙、お腹がすきました」

「何食う?」

「ベリーのタルト」

「そりゃ菓子で飯じゃねえ」

軽くこつんと七夜の頭を小突いて、手元に焼きたてのパンが乗ったモーニングセットを呼んで差し出す。

「ワオ」

「その言い方、某風紀委員長を思い出すな……」

瞬間、空牙の気配が変わる。七夜もそれに気付いたのか、顔をあげて周囲を見回している。

「誰かが結界内に入って来たな」

「キティじゃなくて?」

「違う。これは……はあ？」

情報を探っていた空牙が素っ頓狂な声をあげた。

「何よ」

「いや、なんつーか……」

「さっさと言いなさいっ！ 空牙のくせに黙ってるなんて生意気よっ」

「その顔でその言い方やめろ、マジで勘違いしそうになるから。で、侵入者だけど……ナギ。ナギ・スプリングフィールドだよ。それも十歳前後」

空牙の言葉にがばっと七夜が起き上がる。もちろん、彼女の手元にあったモーニングセットがベッドの上に転がったのは言うまでもない。

ばたん、と屋敷の玄関が大きな音を立てて開かれる。

「出てこい、吸血鬼 ！！」

まだ声変わりのしていない少年の声が玄関ホール内に響く。

「呼んだ？」

ふわり、と七夜はナギ少年の後ろから抱きつく。

「う、うわー！ー！ー！ー！」

「レディの前で大声で叫ぶなんて、イギリス紳士失格ね」

「わ、悪かった……じゃなくて！ おい吸血鬼っ、俺がお前を退治してやるから覚悟しろ！」

「はいはい。屋敷内で魔法使うと怖いお兄さんに叱られるから外でやりましょ」

ひよい、とナギの体を抱き上げて七夜は外に出て行く。七夜にしてみれば、暴れるかと思っただがナギはじっとおとなしいままで、むしろ頬を染めてどこか安心した表情を浮かべている。

「どうしたの？」

「……なんか、すげえいい匂いがする……」

「そお？」

（うん、可愛い。ちっこいナギは可愛いわ。愛でて撫でくり回したい）

心の中で葛藤しつつ、どうにか欲望を抑えて少しだけ強めに抱きしめる。子供の体温は高く、少し熱いくらいだった。

「……熱い？」

ぴた、とナギの額に手を当てると明らかに熱い。

「少年、貴方熱があるじゃない」

「へっ……？」

「よく見れば顔も赤いし、ダメじゃない大人しくしてなきゃ」

七夜はナギを抱き上げたまま、再び屋敷の中に戻っていく。玄関ホールでは空牙が待ち構えており、当然のようにナギを受け取った。

「じゃ、頼んだわよ」

「頼まれた」

転移したのを見届けて、七夜はランドリーから大きめのタオルと洗面器、キッチンから氷を取り出して袋に入れ、洗面器の中にタオルも氷枕も放り込んだ。

「ケル」

呼べば彼女の影の中から三つ首をした漆黒の大きな犬の魔物が出てくる。

「これを空牙の所まで運んでね」

『はい、おかあさん』

音にならぬ声で了承し、背中に洗面器を乗せて屋敷の奥へと歩いて行った。

ケル 正式名称・ケルベロス は七夜が暇つぶしに召喚術を勉強した時、試しに行った召喚で召喚された魔物で、世間では冥府の番犬として有名な存在。七夜が契約し、空牙が一部の魔力を分け与えたことから、この獣は七夜を主兼母、空牙を父として認識するようになった。七夜の正式な使い魔である。

ちなみに、同じような契約方法でオルトロスというケルベロスの弟にあたる存在と、フェンリル狼と呼ばれる魔狼もいる。

ケルベロスが消えた後、七夜は手早く卵にお米と人参や椎茸など数種類の野菜を準備する。鍋にだし汁と野菜を入れて煮込んだ後、味付けしてから研いだお米を鍋に入れる。

しばしまた煮込んだ後、溶いた卵と残りの野菜を入れてかき混ぜた。

「うーん……このくらいかな」

お手軽簡単卵雑炊の完成である。

「あ、鶏肉あったから入れればよかった」

雑炊に乗せたお盆を持ちながら客室に入ると、ナギが真っ赤な顔をしてベッドの上で唸っていた。

「自覚したら一気にきたみてえ」

「空牙が熱を取ってあげたらいいのに」

「キティやお前みたいな奴ならまだしも、こいつは人間だからな。風邪ひくことで体に抗体が出来んだよ」

ベッドの下で丸くなるケルベロスの頭をそれぞれ撫でて、ナギの額に水で冷やしたタオルを乗せる。

「ナギ、起きれる？」

「んう……へ、き……」

空牙の助けを得てナギは上半身を起こすものの、視線は虚ろでおっとしている。七夜はそんなナギの口元に匙を持っていく。自らの息で覚ましつつ「あーん」と言うと、まるで条件反射のようにナギが口を開ける。

しばし、親鳥がヒナに餌をあげるように繰り返していると、すっかり雑炊鍋は空っぽになった。

「食欲はあるから、それなりに大丈夫だな。七夜、薬は？」

「この世界用に薬草を煎じたものがあるけど、子供にはきついかもしれないわ。与えてみる？」

「下手に抗生物質なんか与えると、この世界の薬の効果が下がるかもしれないし……仕方ない。持ってきてくれ」

「わかったわ」

薬を取りに戻った七夜は不意にあることに気付く。

「……あら？ 私達とナギが知り合いになったらキティとの関係どうなるのかしら」

しばし逡巡するも、持ち前の前向きさ「なんとかなるわね」で終わらせたのだった。

少年が来ました(後書き)

お気に入り登録ありがとうございます！

主人公達は付き合っていないです。ただ、恋人以上家族以上な相棒なだけです(え)

たぶん、普通に他に恋人作ろうと思えば作ってしまう人達です。でも最優先はお互いです。

主人公の使い魔はもふもふ系。犬とか狼とかもふもふ系。もふもふいいよ、もふもふ。

少年が懐きました

「百重千重と重なりて、走れよ稲妻。千の雷！！」

無数の雷が七夜に向かって降り注ぐが、そのベクトルはすべて変えられ彼女に当たることはない。

「ちくしょー！！ 何で当たんねえんだよ！」

「それが私の能力だもの」

七夜が持つ能力の一つである『一方通行』は、本来運動量・熱量・光量・電気量など、体表面に触れたあらゆる力の向きを任意に操作・変換する能力もので、魔法攻撃にはそれほど強く作用するものではなかった。しかし、七夜は空想具現化能力との組み合わせで能力を強化。現在の効果は『すべての事象のベクトルの任意操作及び変換』である。

「でも、ナギも成長したわね。魔弾の射手の本数も増えだし、魔法学校でも優秀な成績で卒業出来るんじゃないかしら」

「そのことなだけどさー、俺学校辞めようと思って」

「はあ？」

「だって世の中にはナナ姉やクー兄みたいな強い奴がいんだろ？俺、そいつらと戦ってもっと強くなりたい」

ナギが初めて七夜と空牙の屋敷に突撃してから一年。最初の高熱を出した時の看病が効いたのか、すっかりナギは二人に懐いていた。

七夜から魔法を教わり、空牙から体術を学ぶ。おかげでナギは十歳を前に近隣でも大人顔負けの魔法使いになっていた。

「そうね。確かに世界は広いもの。魔法が強い、体術が強い、剣術が強い。様々な強さを持つ者がいると思うわ。でもね、ナギ。その力の使い方をよく考えなさい」

「力の使い方？」

「ええ。例えば、ナギが依頼を受けて魔法でとある盗賊一味を滅ぼしたとするわ」

「うん」

「でも、その盗賊一味は戦争で孤児になってしまった子供たちを養うために盗賊をしていた。親同然の盗賊達を殺された子供たちはナギを恨んで貴方を殺そうとする。さあ、貴方はどうする？」

「それは……」

幼さの残る顔で必死にナギは考えていた。

「子供たちを盗賊達と同じように魔法で殺す？」

「っ」

「それとも、貴方が子供たちに償いとして殺される？」

「……………俺は」

口を開こうとする言葉が出てこないのか、すぐに閉じられてしまふ。

「……………つまりね、力を得ればそれだけその力に頼ろうとする者も増えてくるわ。そして、その力を揮うことで助かる人もいれば、逆に憎む人もいる。並外れた力は時に反感を買うものよ。私たちを見ればわかるでしょう？」

真祖の吸血鬼であるだけで七夜は人間から迫害され、立派な魔法使いを名乗る者達から恐怖の代名詞として恐れられている。

それは全て、並はずれた強さにある。

「だからね、最初にどうして力が欲しいのか、何のために力を揮うのか。それを考えなさい。貴方の場合は、何のために魔法を使うのか、ね」

「何のために、魔法を、使うのか」

「そうよ。ナギはどうして強くなりたいの？ どうして魔法を使うの？ どんな魔法使いになりたいの？」

「……………わかんねえ。魔法使ってれば強くなれると思ってたし、何のためとか、どうしてとか考えたことなかった」

「ふむ……………じゃあ、ナギが一番最初に魔法を使いたって思った理

由は覚えてる？」

「それは覚えてる。死んだ親父がおふくろを守れって言ったんだ。だから、魔法が使えるればおふくろを守れると思って……あ」

「わかったみたいね」

「うん。俺、守りたかったんだ。おふくろを守るために魔法を使いたかった。強くなればおふくろを守れると思ったから。でも、ちゃんと守れる前におふくろも死んじゃった……」

悲しみに満ちた顔をするナギを七夜は抱きしめる。それくらいしか出来ないのだ。

七夜には生前死ぬまでしつかりと両親がいた。両親より先に逝くという親不孝をしてしまった人間だ。今、彼女が持つ考えはそういう生活の元に根付いた考えで、違う環境で生きて来た者達すべてに通じるとは思っていない。

ただ知ってほしい。

七夜が考えているのはそれだけだ。

「二親に先に逝かれるのはつらいよな……」

「空牙？」

「クー兄？」

ほん、とナギの頭に手を置きながら空牙が姿を現した。

「俺もそうなんだよ。俺がガキの頃、事故でな。それ以来親戚に引き取られて、実の息子みたいに育てられたけど……あれも俺の幸運値の代償だと思うと、な」

自嘲的な笑みを浮かべる彼に、七夜の胸が締め付けられそうになる。

「……空牙、私は絶対いなくなるわよ。私はあんと永遠を生きるんだから。そうでしょ、相棒」

いきなりの言葉に空牙は目を瞬かせ、そして笑った。

「そうだな、相棒。お前と俺はずっと一緒だもんな」

「そうよ」

「ナナ姉とクー兄、ずりい。俺も一緒にいたい」

「バーカ。いつかお前だって、ずっと一緒に生きてやりたいって思える奴に出会えるさ」

「男でもいいわよ」

「七夜自重しろ」

ぎりぎり空牙の手が七夜の顔を掴む。さすがに数百年も共にいれば遠慮はない。小顔の七夜はすっぱりと空牙の大きな手に包まれ、痛みを耐えつつ空牙の腕をばしと叩く。

「ちよつ、ギブギブつ。アイアンクローはやめて！」

「すげー!!! クー兄クー兄つ、俺にもその技教えてくれ！」

「ナギにはまだ早いかもなー」

「ケチ！」

「ケチじゃねえ。お前の手がまだちっこいんだよ。大人になったら教えてやる」

「約束だからなっ」

「ああ」

七夜から手を離し、拳を突き合わせる空牙とナギの姿は、まるで兄弟のようでも微笑ましいと七夜は思う。出来ることなら、このまま敵対することのないことを願いたい。

(なんだかんだ言っただけでキティとナギが会っていないのは、この世界の修正力によるものなのかしら?)

痛みが残る顔を擦りながら、ここ数十年会っていない妹の事を考え、手持無沙汰に影から呼び出したフェンリルの毛並みを撫でる。

「……もふもふ最高」

フェンリルの巨軀に包まれ、うっとりとした艶やかな毛並みに顔を埋めた。

「ナナ姉、俺もフェン撫でてえっ！」

「んー……フェン、大丈夫？」

『大丈夫ー』

「いいつて」

「やった！」

七夜の近くに寄り、ナギもフェンリルの毛に埋もれる。

『おとーさんもー』

「へいへい」

フェンリルの望みに空牙が応え、大きな体を背もたれにしてどこからともなく本を取り出した。

「あ、そうだ。俺クー兄に聞きたいことあんだけど」

「ああ？」

「なんでクー兄、刀六本も持てんの？ 指の間に挟むとかありえねえんだけど」

ナギの問いに七夜は毛並みに埋もれながら空牙の戦闘スタイルを思い出した。日本刀を愛用の武器にしてから、空牙はどういう戦闘スタイルを取るか考えていた時期があったのだ。だが、それは七夜の一言で決まった。即ち、「六爪最強」の一言で。

「それはねナギ、筆頭クオリティだからよ。ね、空牙」

「そうだな。筆頭クオリティだな」

「はあ？ ひつとーって何だよっ?!」

「まあ、その筆頭クオリティを再現出来るあんたもすごいわ」

「そんなに褒めんよ、照れるじゃねえか」

「だからひつとーって何なんだよ……」

中庭の一角で、太陽の光に包まれて三人は少々騒がしいながらも穏やかな午後を過ごす。

そして数カ月後、ナギは宣言通り魔法学校を中退し旅立った。

二人が次にナギと会うまで、数年の月日を要するのだった。

少年が懐きました（後書き）

3000PV越えありがとうございます！！あとお気に入り登録も！
本当にうれしいですっ。これからもがんばります！

六爪は本当にある意味最強だと思います。

あの六爪キャラ大好きです。いいよ、筆頭。
次回から大分裂戦争時代突入です。

実は今までこの連載をサイトと同時アップしてましたが、この話からここで先行掲載していくことにしました。ある程度たまったらサイトにもアップします。

戦いの始まりです

「そつだ、旅に出よう」

「どつかの鉄道会社のキャッチフレーズみたいに言うな」

いきなりの七夜の発言に空牙は大きなため息をついた。

共に生きるようになって六百年弱。彼女の突然の言動に慣れたつもりではいたけれど、もう少し大人しくしてくれないものかと思は思つ。

この遠慮のなさが彼女たるゆえんでもあるし、自分に心を許している証拠でもあるのだが。

「で、何でいきなり旅なんだよ」

「逆算してたらそろそろ魔法世界で大戦……確か大分裂戦争だった？　それが始まる時期じゃないかと思つて」

「それで？」

「生アリカ王女が見たいです」

自分の欲望まっしぐらの七夜に再度空牙は大きなため息をついた。

「ついでにでっかくなつたナギも」

「あいつ、俺らが鍛えたせいで原作よりも強くなった感もあんだけど、大丈夫か？」

「強くなっても魔法アンチヨコないと使えないから大丈夫よ。そこは原作と一緒にだし」

原作ブレイクの一つとして、ちゃんとナギを肩書通りの魔法使いとして成長させよう計画を発動したのだが、勉強嫌いが高じてか、まったく呪文を覚えられなかったのだ。

その代わりに、と言って空牙が体術を教えて、反則技として最後は杖で殴れ、もしくは相手の杖を折るようにと教えたのだが。

「ま、なんとかなるか」

「というわけで、レッツゴー魔法世界よ」

「へいへい」

空牙の魔法で作られていた屋敷は彼の意思一つで消えて行く。他にもこの世界の魔法使い用に、四次元収納や異次元収納をしたものも用意してあるが、基本的には空牙が創造した屋敷を使用している。

収納してある屋敷以外にも、先の事を考えて世界にいつくか隠れ家を二人は確保しており、そのうち旧世界の日本に二つほど存在している。

本来、互いの世界を行き来するには“門”を使用するのが通例だが、この二人にそれは通用しない。空牙がいればどこでも転移可能

なのだから。

最初に二人が降り立った場所は、昔空牙が居住地にしていた森だった。何かあった時のために結界を張り続けていたために、森は静寂と心地いいマナの満ちた空間を維持し続けている。

「空牙さん、空牙さん」

「何ですか、七夜さん」

「今まで洋風だったので、今度は和風の旅館みたいな御屋敷にしたいです。豊万歳」

その言葉に異論はなく、空牙は脳内でイメージを纏めるためにしばし目を瞑る。

「こんな感じ、かな」

瞼を開けて、指を鳴らすと目の前に和風建築の建物が具現する。ただし、そこにあるのは建物だけで、中身は別空間へと繋がっている。

「京都とかにありそうな感じね」

「実際にある旅館の離れを参考にしてみた。この世界にあるかどうかはわかんねーけど」

「へえ……」

言いながら玄関をくぐっていくと、真新しい畳の香りが二人の鼻

をくすぐる。その香りの懐かしさに軽く酔いながらも、空牙は内装の修正を忘れない。

屋敷を創造するたびに、空牙も七夜も居住者は二人しかいないというのに、細かいところまで拘りたがる。それは何故なのだろうか
と不意に考えたが、性分ということで落ち着いた。

「はいはい、私の部屋は和モダンな感じがいいです。露天風呂付き
客室みたいな感じで」

「ようは露天風呂つきたいんだな」

「うん。内風呂から続いてるとうれしい」

「了解」

一瞬空間が揺らめいて、揺らめきが収まったあと目の前の扉を開けると中には10帖ほどの二間続きの部屋があり、ちょこんと掘り炬燵仕様のテーブルが中央に置いてある。その奥に襖で区切られたさらに広めの和室があり、一見すると布団が敷いてあるようにしか見えない和ベッドが。

七夜の希望通り、内風呂から続くように露天風呂もつけてある。

露天風呂からは庭園が見えるように造り替えたので、そこから四季折々の草木が眺められるようにしたのだ。

「そっちの襖開けたら俺の部屋に繋がってるから」

「OK」

誰から見ても、和風旅館の一室と言った感じだった。

「空牙、もう少し庭広く出来ない？ ケル達遊ばせるのに少し小さいと思う」「

「どうせなら二万坪くらい作っておくか」

「広っ！」

一瞬にして広大な敷地を持った庭園と化す。

空牙は伝統的な日本庭園を模して、江戸時代に流行した廻遊式の要素を取り入れ、池を中心として島・山を作り所々に茶庭や四阿を配して、茶庭に向かうための露地を橋などで連結している庭を作った。

花鳥風月を楽しむために最大限にまで配慮され、洗練された造園美は日本人ならではの感性だと空牙は思う。

「本当は兼六園辺りをそのまま持ってきたんだが、さすがにそれはやべえかなっと思っっちゃめた」

「別に空牙の空間なんだからいいんじゃない？」

「……それもそうだな。よし、兼六園にしよう」

「ってか、これじゃケル達遊べないじゃない……」

「……あっちに原っぱ作っておく」

また空間が揺らめき、庭園がその様相を変化させる。それでも基本的な作りは変わっていないかった。

「空牙、キティに連絡しなくても大丈夫かしら？」

「あ、そうか。転送先の魔法変更しとかねえと……」

拠点を森に構えてから数日。二人は帝国と連合を行ったり来たりしていた。二人の容貌は並外れた美貌として殊の外目立つと同時に、その悪名も魔法世界に届きわたっていた。何度も『マギステル・マギ立派な魔法使い』を名乗る者達に襲撃されることに飽きた二人は、空牙の力で幻術を身にまとって行動することにした。とはいっても、基本的に髪色の目の色を変えた程度だったが。

小さくも大きくもないレストランで、二人は昼食を取っていた。そこで空牙は食後の一服と愛用の煙草に火をつけたところで、周囲に張っていた監視用のラインに何かに触れるのを感じたらしく、七夜に視線を向けてくる。

「七夜、こっから東に十キロほど行った所にナギの気配がすっけどうする？」

ちゅるん、と桜色の唇にパスタが吸い込まれる様子に、周囲の男たちが生唾を呑み込んでいる。

七夜が参考にしたキャラクターのイメージそのままのスタイルは、他者から見て極上のボディラインを誇っており、まさに出る所は出て締まる所は締まっているといった感じだ。一度空牙と離れて行動した時はナンパの嵐だったために、七夜は二度と別行動をしないと誓った。

一度や二度ならいいものの、歩くたびにされては逆にうっとおしい。

「当然行くわ。ナギ以外に誰がいそう？」

「ラカン以外はあるな。たぶん、あの鍋の話の前辺りじゃね？」

「あー、あの鍋の話ね」

白く長い指を口元に当てて、脳内から記憶を引っ張り出す。ついでにその後のことも考えつつ、最後のパスタを食べ終えた。

「じゃ、行くか」

「ええ」

会計を終え、人通りの少なくそして誰もいない場所を見つけて二人は転移する。転移した先は森の中で、そこを数人の男たちが叫びながら魔法を何かに向けて放っている。

「あいつら、何やってんの？」

「悪魔が数体いるみてえ」

「じゃ、私達の出番ね」

軽やかな足取りで七夜は男達がいる方向へ歩いて行く。そして、男の一人が魔法を放とうとした時、彼女の長い爪が悪魔たちを切り裂いた。

「はあい、ナギ。久しぶりね」

「ナ、ナナナナ、ナナ姉！？」

幻術を取り払い、桜黄金の髪と紫の瞳を露にした七夜は、呆然としているナギの頬に挨拶代わりにキスを落とす。

「残りも始末しちゃうわね」

口元に笑みを浮かべて、同じように残りの悪魔たちを切り裂いて行く。本来、悪魔は切り裂いた程度では死なない。破魔の力を持って切るか、完全に消滅させない限りは復活してしまうのだが、七夜有能力を持ってすれば簡単なこと。

（こういうとき、本当に直死の魔眼は便利ね。人間にはあまり使いたくないけど）

爪で切り裂かれた悪魔たちは綺麗に分割され塵となって消えて行く。

「あ、相変わらず反則だよな、ナナ姉は……って、待てよ。ナナ姉がここにいて……」

「よお。久しぶりだなあ、ナギ」

啜え煙草で日本刀を片手に持ちながら、空牙が七夜達の前に姿を現す。

「空牙、遅いわよ。全部終わっちゃったじゃない」

「お前いれば充分だろ。しかし、でかくなつたなナギ」

ぼんっ、と空牙がナギの頭に手を置く。

「そりゃ五年も経つんだから、でかくなるに決まってるだろ！」

「五年かあ……」

「ガキの成長は早えからなあ」

「……ナナ姉もクー兄も年寄りくせえ」

「空牙」

「おっ」

「いっ、いでっ、マジで、痛いっ!!」

がしっ、と空牙の手がナギの顔を掴み、そのままギリギリと力を込める。

「空牙のアイアンクローは痛いわよー」

「し、死ぬっ！ クー兄っ、マジで俺死ぬっ！」

「はっはっは、15のガキにはまだまだ躰が必要だよなあ」

「そうねー」

「ぎゃー！...！」

しはしナギの悲鳴だけがその場に轟いていた。

戦いの始まりです（後書き）

兼六園へ行きたいのは私です。と、いうより旅に出たいのが私。

不意に思いましたが、人物紹介とかいりますかね？

サイトのほうには置いてますが、こっちにも必要かなと思い始めた書き手です。

今さらながらの主人公紹介（軽くネタバレ）

女主人公

名前 …… 朱月七夜

性別 …… 女性

外見 …… 桜黄金の髪と紫の瞳

年齢 …… 推定年齢800歳以上 / 外見年齢20代前半

区分 …… 真祖の吸血鬼

能力 …… 空想具現化 / 直死の魔眼 / 一方通行

前世 …… 腐女子な三十路間近のOL

詳細 …… ありきたり神の手違いで死亡したOLさん。某アイドルファンで、日々活動に勤しんでいた。転生後は不老不死で異世界生活を大いに満喫している。ちなみにビジュアル&スタイルはマクロスFの歌姫さん。

腐っているが、基本的におもしろいと思えばギャルゲーだろうが乙女ゲーだろうがBLだろうがノーマルだろうがドリームだろうが手を出す、ある意味カオス。ただし、逆ハー系は苦手。よって乙女ゲーでは全キャラ制覇はするが本命しか興味を持たない。

周囲には頼りになるお姉さんキャラを振舞っているが、空牙に甘やかされているために彼限定の甘えたになりつつある。

付けられた異名は【ブラッディナイトメア染血の悪夢】【闇の女王】で、戦闘スタイルは

爪による直接攻撃か魔法攻撃。得意属性はなく、どの属性も上位まで使いこなせるオールラウンダー。ここぞというときはオプションでもらった「BASTARD!!」の魔法を使う。

空白の時間の際に別世界へとトリップし、空牙同様刀を使うことを覚えた。

使い魔はケルベロス・オルトロス・フェンリルの三匹。最近はネコ科の使い魔も欲しいらしい。

義妹のエヴァンジェリン、義娘のアスナを殊の外可愛がり、弟子のネギを師匠として立派に育て上げてるのが目標。結構ネギにはネタ的な技も教えている。

大戦後は、魔法世界に置いて最も手を出してはいけない存在として畏怖と憧憬と集めている。

男主人公

名前 …… 神威空牙

性別 …… 男性

外見 …… 漆黒の髪に金の瞳

年齢 …… 推定年齢1000歳以上/外見年齢20代前半

区分 …… 神であり魔王

能力 …… 創造・維持・破壊

前世 …… 三十路間近のオタリーマン

詳細 …… 数奇な運命を経て創造主とか、混沌の主とか呼ばれる存在の中でもトップレベルな存在になってしまったリーマン。そんな高位の存在の中で始まりの混沌と呼ばれる存在の手ほどきと力を譲り受け、原初の混沌と呼ばれるようになる。

隠れオタクだったので、仕事時は大変だったらしい。転生後は相棒である七夜と出会って結構オープン。ビジュアルは七夜がファンな某アイドルさん。

普段は温厚な性質をしているが、一度キレると手がつけられない。最強にして最凶のチート。

外見肉食系で中身は草食系寄り、だったが最近はどうやら中身も肉食系寄りになってきている。おっとり肉食系。

義理とはいえ弟妹がいたせいか、世話焼き甘やかし体質で、現在は相棒の七夜と義妹のエヴァンジェリン、義娘のアスナにその体質が発揮されている。特に七夜には甘い。

付けられた異名は【古の災厄】^{トランセンダー}【超越者】で、戦闘スタイルは六本の刀による近接攻撃が主。ただしぶっちゃけなんでも使えるので、ネタに走ることも多い。

彼が現在譲り受けた世界は今のところ五個ほどある。七夜がいない間に世界を一つ作り上げたものの、現在は代理の存在に任せている。大戦後は、魔法世界に置いて最も手を出してはいけない存在として畏怖と憧憬と集めている。

原作サイド

ネギ・スプリングフィールド……七夜と空牙の弟子。『立派な魔法使い』を夢見てはおらず、目標は空牙のように悪魔も足蹴に出来る男になること。しかしそれは空牙本人は却下されたが諦めてはいな

い。

七夜の教えである【常に紳士の如く優雅たれ】「敵には厳しく家族には優しく」と空牙の【女性には優しく、ただし騙されることなかれ】がモットーの紅茶党。

二人の義娘である明日菜とは顔見知りで、結構仲がいい。実のところ……

神威明日菜……本名はアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エントオフユシア。大戦後に七夜と空牙の娘となり、麻帆良に編入する際に神威明日菜と名前を変える。

喜怒哀楽を取り戻してからも幼少時からのクールさは失われおらず、頭の方も悪くはない。理想の女性は義母である七夜だが、義父の空牙に「それだけはやめてくれ……」と常々言われている。

二人の弟子であるネギとは顔見知りで、結構仲がいい。

エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル……七夜と空牙の義妹。

最強無比のシスコンにしてブラコン。心の奥底から義姉と義兄に敵う者はいないと思っっているし、二人以上に素晴らしい存在はいないと信じている。

二人の義娘である明日菜とは、表向き何も無いように振舞っているが、裏では姉妹のように仲がいい。

今さらながらの主人公紹介（軽くネタバレ）（後書き）

人物紹介は必要だというご意見をいただいたので、書いてみました
人物紹介。

今のところ14話現在までの設定で。

剣闘士が襲来しました

ナギ以外の者達が、自分たちに警戒心を抱いているのを七夜は敏感に感じ取っていた。しかし彼女にとっては別に警戒されようがどうでもいいことだ。

彼女が知っているのは一時期面倒を見ていた、ナギ・スプリングフィールドだけなのだから。

「……出会いがしらにこれはひでえよ、クー兄……」

「あんたが余計なこと言うからでしょうが。まっく、本当に変わらない子ねえ」

微笑みながら軽く額を七夜に指で弾かれたナギは、一瞬目を見開いてから、小さな子供のようには笑顔を見せた。

「え、詠春。あのナギは本物でしょうか。私には偽物のような気がしてなりません」

「いや、たぶん本物だ。私も信じたくはないが」

「ふむ。あれがナギの言っておった頼りになる姉と兄か」

ぶつぶつと小声の会話をしっかりと七夜は聞きとっている。

「ナギ、後ろの三人を紹介してもらってもいい？」

「お、おうっ。左から青山詠春、アルビレオ・イマ、ゼクト師匠だ」

「初めまして、朱月七夜です」

「神威空牙だ」

自己紹介する二人に警戒心が薄れたのか、三人も改めて名前を名乗る。そしてナギが七夜達との関係を明かすと、思い切り目を見開いた。

「ナギ……規格外も規格外だと思っていましたが、まさか【闇の女王】に【古の災厄】と知り合いたとは思いませんでしたよ。本当に規格外ですね、貴方は」

「おいこら。どういう意味だ、アル」

「言葉の通りですが？」

しれつと言い募るアルビレオにナギが頬をひくつかせている。そんな様子を横目に、残り四人は極々平和に会話していた。

「なるほど。ナギが強力な魔法を使っていたのは、ナナヤ殿達の賜物か」

「呼び捨てでいいわよ。それに、私達が教えていたころよりもパワーアップしていたみたいだし、それはゼクトの教えの賜物でしょう？」

「詠春、お前名前の感じからして日本人？」

「はい。私は日本出身ですが、それが何か……」

「俺と七夜の名前なんだけど、発音的には日本風なんだよ実は。七つの夜と書いて七夜で、空の牙と書いて空牙なんだ。取りあえずお前だけでも普通に呼んでくれ」

「わかりました。でも、教え込めばすぐに覚えますよあいつらなら」

日本とヨーロッパでは発音の違いがある。魔法世界はどちらかというところヨーロッパに近いので、発音もそちらに近い。日本寄りの名前である七夜と空牙は、微妙に違って発音で今まで呼ばれてきていたのだ。

元々日本人の名前も、アメリカ・ヨーロッパ圏の人間には呼びづらいものがある。

しかし、詠春の言うとおり本来の発音を教えるとアルビレオとゼクトはすぐに二人の名前を本来の発音で言うようになった。ナギだけは幼いころからの呼び方と変わらない。

「なあなあ、ナナ姉達は何でこっちにいるんだ？ 旧世界にいたんじゃないかったか？」

ナギの問いに七夜は旅に出て来たことを伝える。そして本来の目的を伏せ、魔法世界を彷徨っていたことも告げた。

「ならナナ姉達も俺たちの仲間になってくんねえか？」

「……………どうする？」

「どうするって……………俺に聞くことか？」

「一応聞いておいたほうがいいかなーって」

空牙ははあ、とため息をついてから七夜の髪の毛をかきまわす。

「ちよっ!？」

「好きなようにやれ。ちゃんとフォローはしてやるからよ」

ニヤリ、と不敵な笑みを浮かべる空牙に、七夜は目を瞬いてから花が咲いたかのような満面の笑みを浮かべたのだった。

木々が立ちこめる森の中、【紅き翼^{アラルプラ}】の面々はその一角で鍋を囲んでいた。

「これが旧世界の『鍋料理』か！ それじゃ、早速肉を投入〜〜！」

「ちょ、ナギ、おまつ！ 何をいきなり肉を入れようとしている！」

「いいじゃねえか、詠春。旨いんだから！」

「バ、バカツ！ 火の通る時間差というものがあってだな！」

「フッフ、知っていますよ詠春。日本ではあなたのような人を『鍋

將軍』と呼ぶのでしょうか？」

「ナベ・シヨーグン!？」

「つ、強そうじゃな」

「それを言うなら鍋奉行だ」

空牙の突っ込みもむなしく、ナギとゼクトは驚いたまま。その間に七夜が鍋の中につまぐ野菜と肉のスペースを作り、魚の切り身を放り込んでいた。

「姫子ちゃんにも食わしてやりたいくらいの旨さだな」

「姫子ちゃん？」

「ああ、オスティアの姫御子のことじゃな？」

「まあ、戦が終われば彼女を自由にする機会も掴めるやもしれません」

(小さいアスナか……絶対に手元に引き取ってやる……!)

ぐつと箸を持つ手を握り締め、魚を食べつつ改めて決意する。横で空牙の「食べながらじゃ、様になってねえ」という突っ込みを無視して。

しばらく鍋を囲んでの和やかな空気が続いていくかと思われたが、それは突如として飛んできた大剣によって崩された。鍋はひっくり返り、宙を舞った肉達はナギ・ゼクト・アルビレオの三人に回収さ

れ、七夜の好物の魚は地面に落ち、スープを空牙と詠春が頭からかぶった。

「食事中失礼ッ。俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカン!!
いっちょやろっぜッ!!」

「フフ……食べ物を粗末にする者は……斬る」

瞬動術でラカンの懐に入り、刀で斬りつける詠春だったが、その攻撃はまったく通用せず回避されている。

「私の魚……たとえばグキヤラであろうとも、私の手にかかれば……!!」

「待てよ、七夜。ここは俺が殺る……!!」

空牙の手に六本の刀が握られ、金色の目は爛々と輝き、形のいい眉と眦が思い切り吊り上げられている。

普段温厚な人物が本気で怒ると洒落にならないとは洒落にならないとは、まさにこのことである。

あまりの空牙のキレっぷりに、逆に七夜の怒りが鎮静していく。

(……美形が本気で怒ると怖いってこのことよ、このこと。空牙料理好きだから食べ物粗末にする人嫌いなんだっけ。詠春と同類だわ)

「お、俺がクー兄の代わりにやるからクー兄が大人しくしてくれ! 頼むからっ!」

詠春が倒されたのを見計らってナギがその場を飛び出し、ラカンと対峙する。その後、延々と続くナギとラカンのバトル。

「……殺意が治まらねえんだけど。それにナギの野郎、肉ばっか食いやがって。あれほど野菜も食べと言ったっつーのに。教育すつか？」

「ならばあの殴り合いが終わったらすればよかるっ？」

「……それもそうだな。いいこと言っじゃねえか、ゼクト」

空牙が六本の刀を一時的に鞘に収めたのを見て、七夜が異次元収納ポーチからテーブルセットを取り出し、彼を落ちつかせるためにコーヒーとシフォンケーキを用意する。

「空牙、コーヒーいかが？」

「もらっ」

「……七夜よ、それらを一体どこから出したか聞いてもよいか」

「専用の倉庫。このポーチが四次元と繋がってるの。ゼクト、アル、貴方達のコーヒー飲む？ 紅茶と緑茶もあるわよ」

「紅茶でお願いします」

「わしは緑茶がいい」

ナギとラカンのバトルを横目に、四人は和やかな雰囲気です。

タイムを送っていた。

十三時間後、ようやく終息した殴り合い。空牙の治まっていた怒気が再び体から膨れ上がり、鞘から刀を取り出しナギ達のほうへ歩いて行く。念のため、ストッパーとして七夜も一歩後ろからついていく。

「終わったか、馬鹿ども」

「ク、クー兄……!？」

「食べ物を粗末にする奴と、教育の足らねえ奴にはお仕置きだよなあ？」

「げっ、【古の災厄】かよ」

刀を構える空牙の向こうで、ナギとラカンの頬がひくついているのが七夜の目に見えた。ナギに至っては、空牙の後ろにいる七夜に助けを求める視線を向けているが、彼女は微笑みを浮かべるだけ。

「まさか俺まで!？」

「ナギ、お前には少々教育が足りねえと思ってたんだ。少し礼儀つーもんを叩きこんでやるよ」

「礼儀!？ やめてくれよ、そんな堅苦しいモン叩き込むの!俺がやっても似合わねーだろ!！」

「問答無用。さあて、ここは筆頭らしく……partyの始まりだぜ」

剣闘士が襲来しました（後書き）

日本人の名前って、海外の方には発音しづらいのは本当です。

あ、でも今はどうなんだろう……

昔海外に行った際、微妙に名前を伸ばされた記憶があります。もしくは縮められた。

決戦前です

恐怖の肉体言語によるお説教で、以降ラカンが空牙に逆らうことはなく。ナギもむやみやたらに突進していくことがなくなった。無論、食生活も改善である。

「クー兄強えよ……」

「初めてだぜ。俺がここまで恐怖したのは……」

しかし二人の性格上、ひとたび殴り合いに発展してしまうと周囲を顧みない。何度か地形や環境が変わったりしたこともある。そのたびに後処理をするのが空牙で、最終的には食事時に何度目かの殴り合いをして空牙の「行って来い大霊界！」なお仕置きコースが發動する。

ちなみに、空牙のお仕置き名を聞いた際に七夜は某漫画を思い出した。

しかし、七夜と空牙は【紅き翼^{アラルブラ}】に加入はしたものの、そのほとんどは別行動を取って諜報活動に勤しんでいた。自分たちの異名が邪魔をすると思ったからである。

その間には二人を除いた【紅き翼^{アラルブラ}】の面々は活躍し、グレードIIブリッジ奪還作戦に置いてその名前を魔法世界に轟かせた。

そして、新たにガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグとタカミチ・T・高畑の二人が仲間に加わり、調査の元【完全なる世界^{コスモエンテレイア}】が全ての黒幕だと発覚したのも束の間、その【完全なる世界^{コスモエンテレイア}】の手に寄っ

て【紅き翼^{アラレツツ}】は反逆者として追われることになった。

「今回はあっちのほうが一枚上手だったということね」

「迷惑かけて悪い、ナナ姉。あそこもいつ見つかるかわかんねーし……」

「ガキがんなこと気にすんな。大体、俺らもお前に協力するっつったるろ？」

「クー兄……」

追われる紅の翼を空牙は纏めて保護し、結界を張った自分たちの拠点に連れて来たのだ。

「今回の事に関しては、別行動取っていた私達が悪いわ」

「そついうことだ」

空牙がナギの髪の毛をかきまわし、七夜は背中をぽんぽんと抱きしめるようにして叩く。

「……さつきから気になっていたのだが、二人は何者なのだ？」

「ああ、そついえば……アリカ王女。彼らはかの高名な【闇の女王】と【古の災厄】ですよ」

アルビレオがそう言った所、彼の頬をナイフが掠めた。

「つぶぶっ、アルったら私達がそう呼ばれるのを嫌っての紹介の仕

方かしら？」

「……すみません」

「ま、いいけどね。初めまして、朱月七夜よ。七夜でいいわ、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア」

「七夜の相棒の神威空牙だ。空牙でいい」

「おぬしらがあの……」

感心し、満足したような顔でアリカが頷いている。その仕草すらも美しいと七夜は思う。

(うん、生アリカ王女見れて感激です。ついでにテオドラも)

一息つけるために、七夜と空牙はゲストに対するおもてなしとしてケーキと紅茶を用意する。

「空牙、【造物主】ライフメーカーはあんたを見て何か反応すると思う？」

「どうだろうな。存在は知っていても、俺がそうだということは知らないと踏んでんだが……」

「あんたが【造物主】ライフメーカー倒せば簡単なのに……」

「そりゃ、お前でもいいだろ。直死の魔眼があんだから。でも、さすがにそれをしたら修正が面倒くせえ」

どこの並行世界に置いても、根幹の流れと分岐点というものは存

在する。七夜達がいるのは並行世界の一つだが、それでも根幹の流れを崩してしまうわけにはいかない。

よって、流れの重大な部分。所謂分岐点に置いては、七夜達はあ
る程度傍観の立場を取り、根幹の流れにあまり影響が出ない部分で
干渉する。

エヴァンジェリンを家族としたこと。ナギを弟分にしたこと。

これらは根幹の流れにあまり影響しなつたからこそ出来たこと。

この世界が、空牙が創世した世界なら根幹の流れを崩してもまだ
問題は少ないのだが、この世界は空牙が創世したのではなく、将
来の事を見据えて管理・統括権を譲り受けた世界だ。崩した後の影
響やそれに対しての修正作業を行うのがいささか面倒だと空牙は言
う。

「次の分岐点としてはナギが【造物主】ライフメーカーを倒す。アリカ王女と結婚
してネギが生まれる。この二点は外せない」

「そうね。アスナを手元に置くことと、ネギの性格矯正に関しては
問題ないのよね？」

「ああ。いくつかパターンも考えてみたが、少なくとも二人が麻帆
良に行きさえすればいいんだ。そしたら世界の修正力で強制的に根
幹に沿った流れになる」

「OK」

人数分の紅茶を用意して部屋に戻ると、ナギとアリカが二人互い

に見つめあっている場面に遭遇する。

「世界全てが敵　良いではないか。こちらの兵はたったの九人。だが最強の九人じゃ。ならば我らが世界を救おう。我が騎士ナギよ。我が盾となり、剣となれ」

「やれやれ。相変わらずおっかねえ姫さんだぜ」

ナギが跪いてアリカが彼の肩に剣を当てる。

「いいぜ。俺の杖と翼、あんたに預けよう」

誰もが音を発しないように気をつけていた。だが、突如としてバシンツ、と大きな音を立てて襖が開く。その先に、黒いドレスを着て、頭に人形を乗せた金髪の少女が立っていた。

『キテイ！？』

いきなり現れた義妹の姿に、七夜と空牙は驚きの声を上げる。

「姉様っ、兄様！」

「キテイ、いきなりどうしたの！？」

「どうしたじゃないっ！　屋敷にいったら屋敷はないわ、いきなりこっちに飛ばされるわで私は驚いたんだぞっ」

「あ、そっぴや強制的にこっちに飛ばされるようにしたんだっ」

「しかも飛ばされた先が和風旅館！　私は日本にでも来たのかと思

「たわわ！」

「すまん、キティ。七夜が和風がいいって言うもんだから」

うりうりと七夜の胸の谷間に顔を埋めるエヴァンジェリン。頭の上の人形は抱きついた瞬間に地面に放り投げられている。

「ああ……やはり姉様の胸は気持ちいい……ふにふに……」

恍惚とした表情でいるエヴァンジェリンに、少し教育を間違ったかと思う七夜はため息をついた。

「こんな妹で悪いが、一応【闇の福音】ダイク・エヴァンジェルと呼ばれるエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ」

「こっちはチャチャゼロだ」

「ケケケ、ゴ主人が変態ダトハオモワナカツタゼ」

「変態じゃないっ！ 私は姉様の胸の感触が好きただけだっ！ 白くてやわらかくて気持ちいいんだぞ!？」

「まあ、確かに七夜の胸の感触は気持ちいいよな」

後ろから空牙がエヴァンジェリンごと抱きしめるように腕を回し、ついでとばかりに七夜の胸を揉む。

「ああっ、ずるいぞ兄様っ！」

「とりあえず空牙もキティも人の胸揉むのやめて」

爪を伸ばして威嚇すれば、二人は七夜から離れてホールドアップのポーズ。七夜は大きいため息をついてエヴァンジェリンに今までの経緯を説明する。

「勿論私は姉様達について行くぞ。だが、手を出すかどうかはその時に決める」

「ま、それでいいんじゃないの？ 基本的に俺と七夜もそんな感じだしな」

「私、今度は参加するわよ。そろそろ体が鈍って来たし」

「ナ、ナナ姉がやる気になってる……！」

「うふふつ。私たちに反逆者なんて汚名着せてくれた奴らに目にも見せてあげるわ。ねえ、空牙、キティ？」

七夜の声にこたえるようにエヴァンジェリンは彼女に抱きついて微笑みを浮かべ、空牙は七夜の肩を抱いて頬にキスを落とした。

決戦前です（後書き）

羞恥心とか特にはないです、この二人は。

そんなでもってエヴァの性格が変な方向に行っちゃいました。ごめんなさい。

最終決戦です

アリカ救出後、【紅き翼】^{アラルブラ}の面々はあらゆる情報を集め【完全な世界】^{テレケイア}の拠点及び構成員を風潰しに探しだして襲撃する、ということを繰り返していた。

特に七夜のやる気はすさまじく、本来前衛で戦うナギ達三人の出番もなく建物ごと魔法で吹き飛ばすと暴挙に出ている。

「来たれ深淵の闇、燃え盛る大剣、闇と影と憎悪と破壊、復讐の火焰。我を焼け、彼を焼け、そはただ焼き尽くす者。奈落の業火！」

闇の炎が【完全なる世界】^{コスモエンテレケイア}の拠点を包み込む。

「相変わらずナナ姉の魔法の威力半端ねえな」

「あの威力、ナギ以上のものがねえか？」

「俺が使う上位古代語魔法はナナ姉から教わった奴だしなー」

「ナギ、お前はいい加減アンチヨコ使わず魔法を覚えろ」

「無理」

「そこっ！ くっちやべってないで次行くわよ！」

『Yes, Mom!』

軍隊式の敬礼をして、ナギ・ラカン・詠春の三人は彼女について

行く。こうした行動の繰り返しと、アリカヤテオドラといった王族の要請に寄り、中立であった魔法学術都市・アリアドネーの協力を得ることが出来た。

だがその間にウエスペルタティア王国、王都オスティアの王宮より、【黄昏の姫御子】ことアスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシアが【完全なる世界】コスモエンテレケイアの手に寄って拉致。結果的に【完全なる世界】コスモエンテレケイアの最終目的が彼女の持つ【完全魔法無効化】の能力で魔法世界を無へと帰そうとしていることがわかる。

「ガキどもー、【完全なる世界】コスモエンテレケイアの本拠地がわかったぞ」

啞え煙草で数枚の書類を空牙がナギ達に差し出す。

「クー兄、段々口悪くなってねえか？」

「七夜やお前に付き合ってたらそうなる。で、奴らの本拠地はオスティアの王宮の最深部。通称【墓守り人の宮殿】だ」

紫煙を吐き出し、目線で彼が「どうする？」と問いかけているのが七夜にはわかる。

「いつもと変わらず、よ」

七夜の言葉に空牙が喉を鳴らして笑い、煙草を消し潰した。

その後、アリアドネーの面々と綿密な打ち合わせを繰り返し、帝国・連合・アリアドネーの混成部隊を作り出す。

【墓守り人の宮殿】の手前で混成部隊は整列し、いつでも出撃で

きるように準備されている。

「ナギ殿！ 帝国・連合、アリアドネ 混成部隊、準備完了しました。何時でも行けます！」

「おう」

頭に角の生えた、色白の少女が報告してくる。少女はアリアドネの騎士隊の一人で、次期総長に当たる。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

少女はナギの言葉に了承したかと思えば、ミーハーな女の子のようにナギにサインをねだる。

「アリアドネーにもナギのファンクラブがあつたのねー」

「非公式だろ？ だったらどこにでも存在すんじゃない？」

その空間だけが日常とは変わらない。しかし、そこから一步踏み出せば空気は一変する。

「野郎ども、行くぜっ！！」

ナギの号令で部隊が一斉に飛び出そうとする、のを七夜が止めた。前方には千は軽く超えるであろう自動人形と、召喚された魔族と呼ばれる存在がある。

「ナナ姉？」

「ちょっと大変そうだから、一回減らすわアレ」

「七夜？」

「少し下がってなさい。空牙にも本邦初公開よ」

ウインク一つして、七夜が敵軍の前に立つ。

彼女の周囲に魔力が溢れて行き、それによって出来た風が彼女の桜黄金の髪を浮かす。

「イザード・アルザード・キ・スク・ハンセ・グロス・シルク・灰燼と化せ冥界の賢者・七つの鍵をもて開け地獄の門」

「ちょ、待て七夜、お前その呪文っ」

慌てたような空牙の声が周囲に聞こえたのも束の間。

「七鍵守護神」
ハロー・イーン

圧倒的な破壊力で、千を超えていたはずの敵兵達が塵の如く消えて行った。そこに敵がいた痕跡すら残っていない。

「うん、すっきり」

語尾にハートか星か。その手のマークがついていそうな感じで言う七夜に、周囲は呆然としている。空牙に至っては頭を抱えて唸っていた。

「さてと、今のうちに行くわよ。たぶん、次々に増援が来るでしょうから」

「あ、ああ……」

しかし彼らは動こうとしない。

「ぼけっとしてないで動く！」

七夜の怒声に我に返る面々。慌てて入口から中へと入り込み、奥へと駆けて行く。内部に入るにつれて敵の姿も増えて行くが、道を作るべく七夜と空牙が率先してそれぞれの武器で敵を斬り倒して行く。

「ナギっ、あんた達は先に行きなさいっ」

「敵総大将の首取んのはお前の役目だ」

二人の言葉に、ナギは頷いてゼクト達を連れてさらに奥へと駆けて行った。

「言っておくけど、邪魔はさせないわよ？」

七夜が視線を流すと、そこには白い髪をした少年が苦虫を噛み潰したような顔で立っていた。

「……まさか貴方達三人を相手にするとは思ってもみなかったよ。あれほどの手勢を一瞬で消し去った力……脅威だね」

「姉様は最強だからなっ！」

エヴァンジェリンが胸を張って応えるが、少年はそれを完全にスルーした。

「正直、僕は貴方達に勝てるとは思っていない。けど、足止めが僕の役目だ。それに、先に行った彼らじゃ、あの方には勝てない」

「そうかしら？ 人は時に計り知れない実力を出すものよ」

「お前も人形やめたらわかるかもな」

空牙の“人形”の単語に、少年の眉が吊り上げられる。無言のまま、少年は周囲に自動人形や魔族を召喚した。

「気に障ったか？ そりゃ悪かったな」

「兄様、何か意地悪いぞ」

「俺の優しさは家族にしか向けられねーんだよ」

空牙はエヴァンジェリンの頭を撫でてから、仕舞っていた六爪を構える。

「今度は俺が行く。七夜とキティは取りこぼしをよろしく」

「了解」

「わかった」

空牙の目が細められたかと思うと、流れるような動きで近くに

た自動人形と魔族を斬りつけていく。もちろん、敵もやられるだけではなく攻撃を仕掛けるも絶妙なタイミングで七夜とエヴァンジェリンの魔法が決まり、結果的に防戦一方といった感じだった。

「くっ……!」

「私の姉様と兄様が負けるわけがなかるうっ!」

「うーん……キティのシスコンブラコン度が上がってるわー……」

「可愛いからいいじゃねえか」

「それもそうね。可愛いは正義よ、つと爆裂!」ダムド

「……七夜、お前その呪文使えるの俺にも黙ってただろ」

「まあね、ほとんどの呪文使えるわよ。切り札は隠しておくものよ。それに、ある人が言ってたでしょ。女は秘密を着飾って美しくなるもの、ってね」

ため息をつく空牙に対し、七夜は口元に艶やかな笑みを浮かべながら彼の背中に己の背中を預ける。

「そろそろケリつけたら?」

「そうするわ。まわり、頼んだ」

「OK」

一足先に七夜が少年の周囲にいる魔族達を切り裂き、その風圧で

少年の体勢が若干崩れる。その隙を空牙が見逃すはずもなく、少年が魔法を使う前に彼の刀が体を貫いた。

「苦しまずに逝かせてやる」

瞬間、少年は塵となり風に吹かれて消えた。

その様を三人が見つめていると、遠くの方で何かが崩れるような音が耳に届く。

「……ナギがやったみてえだな。俺は迎えに行ってくる。お前らは先に外に出てる」

七夜は頷き、エヴァンジェリンを伴い外へと駆けて行った。

最終決戦です（後書き）

皆が忘れていたろう、第一話でつけられたオプションこと「B A S T A R D ! !」の魔法体系です。

前回の「大霊界」発言もこっから来てます。

よくテイルズとか型月系作品とか脱色とかの技や魔法を使ってる主人公はいるけど、上記の漫画作品の魔法を使うヒロインはおらんだけだろってことでやってみました。でもたぶん、ここぞというときしか使わないと思う。

修行中です

ナギ達の手によりアスナは無事に奪還するも、【造物主】^{ライフメーカー}にゼクトの体は乗っ取られる事件があったこと、そして何より女王になったアリカがオスティア崩落の責任と、すべての黒幕として祭り上げられ二年後に処刑が決まったことにナギはショックを受けていた。

「ナギ」

「ナナ姉……」

「捨てられた子犬みたいな顔になってるわよ」

「どつという顔だ、それ……」

よしよしとナギの頭を撫でる七夜に、ナギはくしゃりと泣きそつに表情を歪めて彼女の胸に顔を埋めた。

「あーっ！ ずるいぞナギっ、そこは私と兄様の、ふごふおっ!？」

「キティ、少し自重しような。あと、こういつときくらい譲ってやれ。あつちでチャチャゼロと遊んでな」

「ふ、ふっ。に、兄様が言うなら仕方ない。行くぞ、チャチャゼロ」

「シカタネーナ、アソンデヤルヨゴ主人」

「遊んでやるのは私だっ！」

エヴァンジェリンとチャチャゼロが言いあいながら去っていくのを見届けて、空牙もナギと七夜に近寄り、ナギの頭を撫でた。

「ナギ、お前はどうしたい？」

「クー兄……」

「もしお前がアリカを助けたいって言うなら、俺と七夜は最大限に協力するぜ？」

「俺は……助けたい。姫さんを助けたい」

「なら話は早いわね。二年後の処刑の日を狙って助けに行きましょう。アリカを公的に処刑させたことにすれば、その後何やったってどうにでも出来るもの」

「その間にナギはもつと力を磨かねえとな。久々に俺が鍛えてやるよ」

「ク、クー兄の扱き……でも頑張るさ。俺は姫さんを、アリカをこの手で助けたいから。あと、大戦は終わったけど、小さい戦はどこでも起きている。だったらあいつを助ける時が来るまで出来るだけ多くの人を助けてみせる」

七夜の目には、先ほどまで落ち込んでいた小さな子供のようなナギはおらず、まるで独り立ちをした一人の男としての顔が映っていた。

アリカの処刑までの二年間。【紅き翼】アラルブラの面々は個々に活動しながらも、情報交換を交わし合い綿密な計画を立てていた。

アリカの処刑台となる場所は魔獣蠢くケルベラス渓谷。魔法を一切使えぬその谷底は、魔法使いにとってまさに死の谷。

「魔法が使えないのなら、それ以外で補えばいいじゃない」

そんな七夜の言葉と空牙の指導のもと、よりいっそう激しい体術の修行にナギは挑んでいた。元々ラカンと長時間殴り合いが出来るほど体力も技術もあったナギだが、ここにきてより実力が磨かれている。

「ナギー、ガトウから気の使い方習ったんだろ？ だったら俺の剣筋の気配くらい読め。殺気込めてるから」

「無茶言うなー！！ クー兄の剣筋読む前に俺死ぬからっ！」

「これでも手加減してんだぞ？ 取りあえず回避に関してはこの辺にしておいて、実践に入るか」

ひたすらに空牙の攻撃を回避することで回避能力の向上。これは

魔獣の攻撃から逃れる確率を上げることを目的としていた。

「三割程度で行くぞー」

同時に空牙の拳がナギの体に直撃する。

「ぐはっ……！」

「ちゃんと気配読めつつたろうが」

「んなこと言っても……」

お腹を抑えつつ呻くナギに空牙がため息を吐く。

「お前、アリカを助けたいんだろ？　アリカの処刑台は魔法も気も使えない場所だぞ？　いくら七夜のサポートが入るとしても、実質助けるのはお前。この程度の鍛錬でしょげてどうする。それとも、アリカを見捨てるのか？」

「見捨てねえっ！」

「じゃあ、続きするぞ」

純粋に体術を磨くことで、肉体そのものを向上させる。空牙との鍛錬という名のガチバトルは、魔力も気も一切使わない。

実力差は激しく、空牙がかなり抑えた状態であつてもナギの攻撃はほとんど当たらないのに対し、空牙の攻撃は九割方ナギにヒット。鍛錬を終える頃にはナギの体は指先すら動かないほどに消耗している。

「ほれ、体力回復な」

「……クー兄、マジで人外だよな。ナナ姉とは違うみてえだけど」

空牙によつて動ける程度には体力を回復させられたナギが首や肩を回しつつ、隣に立つ彼を見上げた。

「なんだ、不満か？」

「まさか。すげえ頼りに思ってるぜ」

につ、と笑うナギの髪を撫でるようにかきまわす。そしてそのまま荷物を運ぶようにして抱き上げる。

「七夜が飯作ってるからな。さっさと行くぞ」

「って、おいっ！ 普通に歩けるうっつーの！」

「大特価サービスだ」

「いらねえよ！」

「ガタガタ言っつな。締めるぞ」

空牙が掌でナギの顔を包むような動作をすると、ナギの動きが一瞬で固まる。

「よし」

米俵のように肩にかついで、屋敷へと帰って行く空牙。担がれたナギを、屋敷で残りの面々が生ぬるい目で迎える。

「ナギ、荷物？」

「姫子ちゃん……」

「アスナ、それ以上はナギが可哀そうだから言わないの。ほら、スープ飲んで」

「ナナヤ、明日はじゃがいものスープがいい」

「OK」

「姉様姉様、私はローストビーフが食べたい！」

「はいはい」

幼女二人に纏わりつかれているにも関わらず、七夜は微笑みを浮かべてそれぞれ相手をしている。その様子に空牙も笑ってナギをソファに下ろす。

「しっかり食ってしっかり休めよ？」

「おー……」

「キティ、ピーマン残すな」

「ぐっ……だって苦い」

「ガキダナ、ゴ主人」

「煩いぞ、チャチャゼロ！」

「アスナも」

「……………」

アスナの眉間に皺が寄る。今まで無表情だったことを考えれば、かなりの進歩だ。彼女に構いたがる七夜や、妹として張り合おうとするエヴァンジェリンによって、日々アスナが精神が成長し、感情が表に出るようになっていた。

「小さく切つてあるから、ほら」

小皿に取り分けてあつた青椒肉絲の中から、一際小さなピーマンを箸で取り、空牙はアスナの口元に差し出す。

嫌そうに見上げてくるアスナに、空牙はちよんちよんと口元を突つつくことで拒否権はないことを伝える。

「あーん」

「……………あーん」

小さく開けた口内にぽいっとピーマンを放り込むと、小さな口がもぐもぐと動く。ただし眉間に皺が寄つたまま。

「苦い」

「いい子だ、アスナ」

偉い偉い、と頭を撫でる空牙の横で、七夜がご褒美とばかりに甘いココアをアスナに差し出す。

「口直し、よ」

アスナが頷いてカップに口をつけた。

「……なんか、クー兄とナナ姉って姫子ちゃんの親みたいだなー」

「この際、アスナ姫を養女として引き取ったらどうです？」

「あつ、それいいな。そうすりゃここに来れば姫子ちゃんにいつでも会えるし」

短い時間の中で食事を取れるほどまで回復したナギが、目の前の料理を猛スピードで平らげながら感想を告げるとアルビレオが提案し同意する。

「私は別にいいわよ。アスナ可愛いし、キティも年下が出来てうれしそうだし」

「俺も構わないぜ？」

「アスナ、どうする？　うちの子になる？」

「？　ナナヤとクウガの子？」

「そう。ずっと一緒にいるわ。アスナを一人になんてしない」

「ずっと一緒……なる。ナナヤとクウガの子になる……！」

ここで初めてアスナが子供らしい笑みを浮かべたのだった。

修行中です（後書き）

アスナと親子フラグ成立です。

ただ、名字を女主人公と男主人公、どっちの名字にしようか迷い中。
）。

京都です

室内の笑い声が溢れ、誰もが笑顔で酒を煽っていた。

無事にケルベラス溪谷からアリカを救出したこと、そしてナギが彼女にプロポーズをして彼女が受け入れたこと。

この二点による祝賀会だった。

「いやあ、めでてえな」

「本当ですね。これで失敗、なんてことになってたら目も当てられませんよ」

「いやね、アルビレオ。ナギが失敗してたら私がアリカを助けてたわよ」

「最初から七夜殿が助ければよかったのでは？」

「馬鹿ね、詠春。女性は白馬の王子様や正義のヒーローに助けてほしいなんていう願望を心の奥に秘めているものよ。それを邪魔したらダメじゃない」

「ほお……なら貴方もそうなんですか？」

「私？ そうね……そういう時代もあった、ってとこね。さすがに

「夢見るお姫様の時期はとうに過ぎてるし」

「七夜つて今いくつなんだ？ 真祖の吸血鬼でエヴァンジェリンより年上だろ？」

「あらラカン。女に年齢を聞くなんて紳士じゃないわね」

「俺に紳士を求めるなよ」

「タカミチー、こついう男になったらダメよ」

「え？ え？」

いきなり話を振られた高畑が戸惑いの声をあげながら目を瞬いている。にんまりと口元に笑みを浮かべた七夜は、彼をからかおうと距離を詰めようとするが後ろから空牙に腰を抱かれて引き離される。

「七夜、あんまりタカミチをからかうな」

「やだ空牙。タカミチ少年の成長を願うてのことなのに」

「こいつには明日ガトウと一緒に感卦法の修行すんだ。使いものにならなくなったらどうする」

「仕方ないわね……」

窘められ、七夜は少し外れた所で食事をしているアスナの所へ向かう。

「アスナ」

「ナナヤ」

「おっ、ちゃんと野菜も全部食べたわね。偉い偉い」

「……食べないとクウガが怒る」

「うん……空牙、オカンだから」

「オカン……？」

「気にしないで。じゃあ、ちゃんと食べたアスナにご褒美ね」

異次元空間から取り出したのはプリン。もちろん七夜お手製である。

「プリン……！」

元々お菓子作りが得意ではあったが、エヴァンジェリンやアスナなど子供が来てからその腕により一層磨きがかかった。普段の料理は空牙が、デザート系は七夜がといった形で分担が出来たほど。七夜も時々料理はするが、空牙の腕には劣ることはわかっていたので本当に気が向いたときにしかしない。

「今度は和菓子でも作ろうかな……ああっ！ 詠春っ、詠春っ！」

「な、なんだっ！？」

「詠春て京都出身なのよね？」

「そ、そうだが」

「なら八つ橋の作り方知ってる？」

「さすがに作り方は……」

「むむむ……よし、京都に行こう！」

「あつ、俺も行ってみてえ！ アリカ、新婚旅行は京都にしようぜ
っ」

ナギと七夜の言葉にほとんどメンバーが興味を示す。詠春は里帰りということになるが。最終的に権限を持っている空牙に全員の視線が集まる。本来ナギがリーダーなのだから、彼が興味を示した時点で行くことは決定してははず。しかし、誰もが空牙に許可を求めると言うことは、この時点でヒエラルキーの最上位に彼がいることがわかる。

「ああ、いいな京都。全員で行くか」

あっさりと出た許可に全員が沸いた。

京都は右京区御室。御室の桜として有名な仁和寺の境内を空牙と七夜は歩いてきた。ちょうど桜の季節ともあってたくさんの人々が桜を見上げては感嘆の息をついている。

ちなみに、歩いているとは空牙と七夜だが、空牙に片手で抱きあげられてちょこんと腕に座っているアスナの姿もある。

「やっぱり御室の桜は一度見てみたかったのよねえ……」

「ああ、ここは有名だからな。嵐電の桜並木も絶景らしいが、ってアスナ口の周りクリーム塗れだぞ」

「アスナー、ちょっと食べるの待ってなさい」

ポーチから取り出したハンカチで七夜はアスナの口元をぬぐう。それが終わると、アスナが首を傾げて空牙を見上げる。

「食べてよし」

その言葉に口元を僅かに緩めてアスナがソフトクリーム攻略に乗り出す。だが、食べ終えた頃にはまたしてもクリーム塗れなのは言うまでもない。

そして、一連の流れを周囲の観光客が見て、桜観賞とは違った意味で感嘆の息をついていた。

三人からは華やかなオーラが滲み出ており、立っているだけで目を惹くのだ。そこにいるだけで存在感がある。

「これからどうする？」

「そうだな……昼飯食って、詠春に頼んでおいた京友禅の体験工房でも行くか」

「アスナ、お揃いの巾着作りましょう」

「うん」

「どうせならどっかの店でアスナに着物買わないか？ 夏用の浴衣とか」

「それいいわっ！ アスナにはどんな色が似合うかしら」

「そうだなあ……」

そんな会話をしつつ、一通り境内を巡り、お決まりのように御守りを買って体験工房へ向かうべくバス停へと歩いて行った。

体験工房では初めての出来ごとに四苦八苦しつつ、アスナが一生懸命な様子に七夜の頬が緩む。

義理の親子になってから、感情の揺らぎが激しくなり、喜怒哀楽のうち【喜】と【楽】は素直に表すようになってきた。言葉もただどしかったのも少しずつ滑らかになってきている。

（時期を見て不老の方も解かないといけないわね……原作は今から十八年後。アスナはその時十四歳で、今はどう見ても五歳前後。小学校には入れないといけないから、そのあたりも考えないと……

あ、ネギが生まれるのって八年後か。八年間ナギ達何やってたんだろっ……)

アスナとネギの年齢差は4歳。それは崩せない。だとすると、少なくとも十年は手元に置いておける。

(アスナはどちらかという和白兵戦のほうが得意だろうから、感卦法をメインに空牙による修行つてところかしら。刀の使い方も教えないとなー)

「ナナヤ、手が止まってる」

「あ」

注意され、頭を軽く振って再び作業に没頭する。

数時間後、出来あがった二つの巾着に七夜とアスナは満足げな笑みを浮かべ、空牙はランチョンマットに描き染められた模様に満足げに頷く。

それらを大事に仕舞い、三人は詠春に連絡を取り、お勧めの呉服店を紹介してもらう。メモをした住所を頼りに向かった店は、いかにも高級感あふれる佇まいの店で、一般の旅行者なら足踏みしてしまう空気を放っていたが、長い年月を生きてきた二人には問題ない。

アスナは若干その空気に戸惑っていたが、空牙に抱きあげられたことで霧散する。

「すみません、青山詠春の紹介で参りました神威ですが……」

「おこしやす。神威様どすね、青山様から窺っております。お嬢様の訪問着をお求めと言つことどすが……」

空牙の言葉に店員から呼ばれた女将と思しき妙齡の女性が奥から出てくる。そのことから、詠春の実家である青山家とかなり懇意にしていることが七夜にもわかった。

「はい。これからの季節に向けて浴衣も一緒に。あとこいつにも同じように浴衣と訪問着を仕立てたいと思っています」

「私も!？」

「まあ、素敵な旦那んを持って奥様は幸せどすな。御所望の色や文様はございますか？」

「特にないので、プロの目にお任せします」

「そつどすなあ……」

七夜とアスナが女将に別室へと連れて行かれる。その間、空牙は出されたお茶を飲んで待つことになる。

数十分後、しっかり着付けとヘアメイクを施された七夜とアスナが出てくる。

「二人ともよく似合ってる」

「ふふっ、ありがとう」

アスナはにこつと笑つことで応えた。

「ほんまによお、お似合おすよ。うちらもばんばん力が入ってしもたんえ」

「どうせなら空牙も一着買えば？ この後夕食食べに行くの、確か……」

七夜が出した店名に、女将は僅かに顔を綻ばす。

「まあ……あこはほんまにええお店や。ほしてどしたら、旦那はんもお見立てさせてもらいきまんねんわ」

「いや、俺は詠春辺りに借りようかと」

「身長差あるから無理じゃない？」

「ぐっ……」

「空牙、何気に肩幅あるし」

「……すみません、お願いします」

女将は快く承諾し、今度は空牙の方が別室へと連れて行かれてしまふ。同じように数十分後、黒地に間隔の狭い滝縞の着物に羽織を羽織って現れる。

しっかりと用意をした三人は、待ち合わせていた場所までのんびりと歩いて行く。待ち合わせ場所では三人と同じように着物に身を包んだ詠春が立っていた。

「悪いな詠春、付き合わせて」

「いや、まさかあの店を二人が知ってるとは思わなかったが」

「昔何度が来たことがあるからな」

「正確にいえば、その時の当主に手ほどきしたことがあるのよね空牙は」

「何やってんですか、あんた」

「詠春にそんな突っ込みされるとは思わなかった……」

がくつと空牙は肩を落とす。それに七夜は苦笑しつつ肩を叩き、アスナが彼の手を握ることで慰める。

「さて、味は昔と変わってないのかな？」

「んー、楽しみっ」

「クウガのより美味しいの？」

「それは好みね」

「頼まれた通り、一番高い奴を予約しましたよ。てっきり空牙殿は儉約家だと思ってたから、少し驚いた」

「それだけの価値があると思ったものには、金に糸目はつけねえよ」

その通り、お金に糸目をつけずに頼んだ最上級の懐石コース料理

に、四人が舌鼓を打つのだった。

京都です（後書き）

京都が好きです。京都に旅に行きたいのは書き手です。
桜が好きです。仁和寺の桜が見たいのは書き手です。

イメージとしては、女主とアスナは京友禅。男主は西陣織。
そしてわりといつもいろいろとすっ飛ばしています。ごめんなさい。

両面宿難が出ました

京都に来て最終日の夜。一行は今まで以上に盛大にどんちゃん騒ぎをしていた。

青山家の庭一面に咲き誇る桜の木の下で、空になつた酒瓶があちらこちらに散らばっている。それでもつまみとなっている食べ物たちがいっぺり皿の上に乗っているのは空牙の教育の賜物だろう。

「酒が美味しい……」

桜の大木にもたれかかり、空牙は杯を傾けつつ酒を楽しんでいる。その横にはしっかりと最高級の大吟醸をキープしていた。反対側にはアスナがちびちびとジューズを飲んでいる。

「空牙、飲んでる？」

頬を桜色に染め、片手にワインボトルを掴んでいる七夜が彼の元にやってくる。

「飲んでる。お前も飲むか？」

「私が日本酒苦手なの知ってるでしょ」

「日本酒飲むと速攻で酔うもんな。洋酒系じゃ絶対に酔わねえのに」

「日本酒とは相性が悪いのよ」

「威張りながら言うことか」

空牙の横に腰を下ろし、グラスにワインを注ぐ。

「そういえば花見してるとたまにカラオケしてる人いるわよね。あれ、素直に尊敬するんだけど」

「いるな、そういや。酔っぱらってるから出来る芸当だろ、あれ。見知らぬ他人に自分の歌唱力披露するなんて素面なら絶対出来ねえぞ」

「ナナヤ」

「アスナ？」

「ナナヤの歌が聞きたい」

「いいわよ」

「お前、さっきと言ってる事違えぞ」

「ここにいつメンバーは知ってる人だもの。見知らぬ他人じゃないわ。それに、可愛い娘のお願いは聞かなきゃでしょ。さて、どんなのがいいかしら？ 季節に合わせて桜ソング？ それとも意表をつけて……Flaming iceとか」

「意表つきすぎだろ、それは。何でいきなり跡部なんだ」

「意外。空牙が知ってるとは思わなかった」

「当時の彼女がファンで、ミュージカル連れて行かれた」

「隠れて言ってたくせに、いろいろと濃いわね」

「うっせーよ」

「でも本当に何にしようかな」

悩んでいたそぶりを見せる者の、七夜の唇からすぐに旋律が漏れ出す。初めは近くにいた空牙とアスナの耳に届く程度の音量だったが、次第にその歌に周囲が気付いたのか、騒いでいた一行の間に静寂が落ちて、七夜オンステージとなっていた。

その後もいろいろとリクエストを受けて数曲披露した所で、盛り上がりは最高潮。しかし無粋にもそれを壊すかのように、叫び声が轟いた。

「あ？　なんだあ？」

「詠春、なんかあつちのほうで妖気出てんぞ」

空牙の言葉に詠春は顔面蒼白で肩を震わせ、屋敷内へと駆けて行ったかと思えば、また猛スピードで戻ってくる。

「両面宿儺が復活しました……封印するので手伝ってくれ！」

詠春の言葉に全員の動きが止まるも、すぐに酔っ払いのテンションそのまま笑いながら出現場所まで飛んでいく。ただし、飛んで

いったのは男性陣だけで、七夜とアリカは二人でグラスを突き合わせる。アスナは七夜の膝枕でお休み中。

「まさかアリカとこうして飲むことになるとは思わなかったわ」

「私もだ。それと、かの【闇の女王】がこんなにも子煩悩とはのう」

「んー、実は昔は子供苦手だったのよ、これでも」

七夜がそう言うとアリカは驚いたように目を瞬かせた。

「いつのまにか平気になってたけどね」

「なら私に子供が産まれたら七夜に世話係をやってもらおうかのう」

「それはいいわね。ナギに似ない賢い子に育てたいわ」

「うむ」

女二人の会話はそれからずっと続き、両面宿儺を倒した男たちが帰って来た後も途切れることがなかった。

両面宿儺を封印するため、京都の一角のとある湖のほとりにやってきた一行。目の前では巨大な鬼が声をあげている。

「なあ詠春。両面宿難って飛驒産じゃなかったか？」

「空牙、そんな野菜の生産地みたいな言い方しないでくれ」

「なんで京都産になつてんだ？」

「だから」

言いかけた所で両面宿難に雷が降り注ぐ。上を見ればナギが杖の上立って大笑いしながら魔法で攻撃しており、続いて「おらあああ！」という叫び声と共に両面宿難が後ろに倒れ込みそうになるが、今度は後ろに回り込んだラカンが同じように叫びながら殴りつけたことで両面宿難の体勢は元の直立不動に戻った。

「あいつら遊んでんじゃねえか……」

「あいつらは……！！」

詠春は刀を構えて両面宿難に斬りかかっていく。どうやらナギとラカンに任せていられなくなったらしい。

「完全に酔っぱらってんな、あいつら」

空牙は一つため息をついて、指を鳴らす。するとその場の空気が変化し、周囲にあった光景がまるで作りもののような異質な雰囲気を放ち始めた。

「境界貼ったから好きなだけ暴れていいぞー」

「さんきゅー、クー兄！」

「よっしゃあ！！」

空牙の言葉に突進タイプの二人が反応し、先ほどよりも威力をあげた攻撃を両面宿難に当てていた。

ガトウとタカミチも空牙の隣でのほほんと三人を見ている。

「やっぱり強いですね、ナギ達は」

「空牙、お前だったらアレどのくらいで倒せる」

「方法次第。時間がないなら一秒もしないうちに消すし、遊んでいならとことん遊ぶぞ俺は」

「……さすが規格外の空牙さん」

「ターカーミーチャー」

アイアンクローの構えを見せた空牙に、タカミチは小さく叫び声をあげてガトウの後ろに隠れた。空牙もそれ以上は何もしようとはせず、両面宿難に攻撃を仕掛けまくっている三人を見ながらあることを考えていた。

(封印じゃなくて消滅なら後腐れなかったりするのか……？ 少なくとも、近衛木乃香の覚醒はなくなる……)

空牙は一瞬だけ、世界に意識を埋める。

根幹の流れに影響は出ないのか。

並行世界として成り立って行くのか。

空牙の問いに“世界”は答えた。

是、と。

（よし、なら消滅ルートだな。ついでにトラップ作っておこう）

「その馬鹿三人っ！ デカブツ消すから戻ってこいっ」

『はあっ！？』

「言うこと聞かない場合はクリムゾンクロー」

『すぐに戻ります！』

クリムゾンクローとアイアンクローの進化形で、握力に加え爪で立てられるので確実に流血。その威力は計り知れない空牙のお仕置き技の一つである。

「詠春、封印だと誰かに利用されかねないから消すぞ。いいな」

「そうしてくれるとこちらも楽だ。頼む」

空牙の発言ですっかり酔いの冷めた三人は彼の後ろでその一挙一動を見つめている。

「師匠、空牙さんはどうやってあれを消滅させるつもりなんですよ

うか」

「わからん。空牙は七夜以上の規格外だからな」

「俺、クー兄のことだから弱らせた所で自分の使い魔にするかと思
った」

「何を言ってるんだナギ。そんなこと出来るわけ」

「それも考えたけど、躰が面倒くさそうだったからやめた」

「出来るのか……」

がくつと詠春が肩を落とすのに苦笑して、空牙は虚空から愛刀を
一本取り出して両面宿難に向けて投げた。刀は払いのけられること
なく突き刺さり、両面宿難はまるで刀に吸い取られるかのようにそ
の大きさを失くしていく。

どんどん小さくなっていき、最後その場には刀しか残っていない。

「よし」

刀を拾い上げ、じつと周囲を見回し何かを見つけたように歩いて
行き、刀を地面に突き刺した。しばらくそのまま動かないでいたか
と思うと、満足げな表情を浮かべて一行の所に戻ってくる。

「クー兄、何やったんだ？」

「両面宿難の力を靈力に変換して、龍脈に流しこんだ」

簡単に言っているが、実際は不可能に近い。

龍脈は大地そのものであり、その力を一介の人間が操ることは不可能。その力の大きさに溺れ狂いゆく。

龍脈の力を僅かに借りて術を行使する術師もいるが、空牙のように直に龍脈に力を注ぐなどという芸当は人間には出来ない。一歩間違えばパワーバランスが崩れて亀裂が起きる。

「あとはついでに……」

不敵な笑みを浮かべて、空牙は両面宿難が封印されていた場所に同じように刀を突き刺す。すると刀から水のようなものが滴り、それは小さな水球になったかと思うと空気に溶けるようにして消えて行く。

「空牙、何か両面宿難の妖気を感じたんだが」

「ん？ こいつを消しました、なんて言ったらいるいと煩え奴とが出てきそうだろ？ だから一部妖気をここに残して、再封印っぽくしてみた。ついでに、封印を解こうとする奴がいた場合に対してもトラップ仕掛けておいたからな」

「トラップ？ どんな？」

「それは見てのお楽しみ、ってな」

チエシヤ猫のような笑みを浮かべる空牙に、ナギ達はどこか納得のいかない顔をしていたが、それ以上は言うこともなく再び宴会をなるべく七夜達の所へ帰っていくのだった。

その後、空牙と七夜が【紅き翼】アラルプラの面々と再会するまで数年の時
を有した。

この空白の時間の中で、また一悶着あったりもするのだが、それ
はまた別の話。

両面宿難が出ました(後書き)

Flaming iceなのは執筆当時久々にリピってたからです
(笑)

これで一応大戦編は終了です。
続いて原作編に入りますが、こちらの話は少しお休みをいただいで、もう一個の連載作品を更新していこうと思っています。
また、本文ラストにて述べた空白の時間の一悶着。こちらはサイトで限定掲載予定です。

原作が始まりました

イギリスはウェールズの山奥のとある場所。そこに一つの学校があった。学校の名はメルディアナ魔法学校。その名の通り、魔法と呼ばれる技術を学ぶ学校である。今、その学校のホールで卒業式が行われていた。

「ネギ・スプリングフィールド君」

「ハイ！」

ネギと呼ばれた赤毛の少年が元気一杯に声を出し、しかし緊張からかぎこちない動きで壇上へと向かっていく。

「よく頑張った。修業先でも頑張るように」

「ハイ！」

同じように次々に卒業生たちが名前を呼ばれ、卒業証書を手渡されていった。

卒業式が終われば、ネギは一枚の紙を片手に楽しそうに廊下を歩いている。彼にとってはこの卒業が何よりも楽しみだったのだ。

「嬉しそうね、ネギ」

「当然だよ、アーニヤ。昨日ようやく七夜師匠の試験に合格して、学校も卒業を迎えるから特製ケーキ作ってくれって！」

「何それ！ 七夜姉様の特製ケーキ！？ うらやましすぎるわ……」

「それに、七夜師匠も修業先に付いてきてくれるって言っし」

「七夜さんが一緒だと安心だわ」

「ネカネお姉ちゃん」

金髪の女性　ネカネ　は安堵の笑みを浮かべながらネギの横に並びながら歩く。

「そう言えばネギ、修業先は何処だった　私はロンドンで占い師だったけど」

「何処だったの？　ネギ」

「ちょっと待って、今浮かび上がるところだから」

ネギは手渡された紙を見る。先程まで白紙だったそこには、光で造られた文字が浮かび上がり、書かれていた文字は。

A teacher in Japan.

「日本で先生をすること」

『ええー！？』

ネギがそう読み上げると、側にいた二人が驚きの声を上げる。そして二人は即座に校長室へと駆けこんだ。

「校長先生！ 先生って、どういうことですか！？」

「ほう、先生か……また大変な修行じゃのう」

「何かの間違いではないのですか？ まだ十歳なのに、先生なんて無理です」

「そうよ！ ネギったら、ただでさえボケなのに……」

ネカネに続いてネギの幼馴染の少女、アーニヤもそう言う。十歳という年齢で教師という修行では仕方ないのかもしれないが、散々な言われようだった。

「しかし、そう書いてあるなら決まったことじゃ。『立派な魔法使い』^{マキステル}になるためには、頑張って修行してくるしかないのう」

「別に僕『立派な魔法使い』^{マキステル・マキ}になりたいわけじゃ……」

ネギは小声で抗議するが、ネカネ達はまったく聞いておらず、口論が続いている。

「無理がありません！」

「何度も言うがすでに決まったことじゃ。撤回はない」

「ああ……」

「ネカネお姉ちゃん、大丈夫だよ。七夜師匠も一緒だから」

「なぬ!？」

「そ、そうだったわね。七夜さんが一緒なら私も安心だわ」

「それに日本だったら空牙師匠もいるよ」

「なんじゃと!？」

「まあ! 空牙さんと七夜さんが二人揃ってるなら本当に私も安心してネギを送り出せるわ」

「ほんと、ほんと。あの二人がネギと一緒になら大丈夫でしょ」

「ネ、ネギ。本当にあの七夜殿と一緒に……? それに日本に空牙殿が?」

「あれ? 知らなかったんですか? 僕が弟子入りしたときにはすでに空牙師匠は日本に行っていましたよ。娘が日本の学校に転入していて、保護者として日本とイギリスを行き来しているそうです。僕も何度かあったことあるんですけど、すごく綺麗な人でした」

「そ、そうか……」

校長用の重厚な机に突っ伏す姿に、ネギを含め三人は首を傾げるのだった。

テーブルの上に乗るケーキにネギは目を輝かせていた。

「卒業おめでとうネギ。これは私からのお祝いよ」

「ありがとうございます、七夜師匠！」

苺ムースのデコレーションケーキは控えめな甘さで、さらに七夜が差し出した紅茶の香りにさらに目を輝かす。

「これって……！」

「さすがネギ。本当に紅茶が大好きね、昔から」

「七夜師匠の入れてくれる紅茶が一番好きです！」

七夜がネギに出したのは、ダージリンのセカンドフラッシュで、それも数少ないマスカテルフレーバーの茶葉だった。

「見るたびに飲んでみたいんですけど、僕のお小遣いじゃなかなか買えないんですね」

「しょうがないわよ。あなたまだ九歳なんだから」

「早く大人になって茶葉の大人買いがしたいです……」

カップを口に含み、香りと味を楽しむネギは将来の自分の未来図

を思い描いているのか、目がどこか遠くを見ていた。

そんな愛弟子の姿に七夜は苦笑する。

「ネギが弟子になってもうすぐ六年。時間が過ぎるのは早いものね……」

「あの時師匠達がいなければ、僕たちは全員死んでいたかもしれませんが」

「ナギが間一髪で駆けつけてたから大丈夫だったと思うけどね」

「でも、最悪父さんのあの魔法、村の人に当たってたらと思うとちよつとぞつとします」

「ああ……」

七夜の脳裏に当時のことが蘇る。

その日、七夜は空牙と共にネギがいる村に来ていた。理由としてはその日に悪魔が襲来することがかわっていたからなのだが。

ついでに同じようにやってくるナギを息子の前でシメるといふことも決めていた。

悪魔の手でどんどん石化していく村人たち。

スタン老が石化し、危うくネギがというところで空牙が颯爽と登場して悪魔の側頭部に蹴りを叩きこんだ。吹っ飛んだ伯爵級悪魔が起き上がる前に顔を踏みつけ、格の違いという奴を教え込む彼の姿

を後にネギはこう語っていた。

あれこそ自分が進むべき先にある姿だと。

聞いた七夜が軌道修正したのは言うまでもない。

空牙の力によって悪魔たちは全員消滅。伯爵級悪魔は空牙の下僕となつてから封印される。

七夜は村に駆けつけ途中だったナギを襲撃し、首根っこを引つ張つて村へと連れてきた。そして息子の前でフルボッコにしたのだ。

理由としては彼らの最愛の義妹であるエヴァンジェリンに対して呪いをかけ、なおかつ自ら期間を設けておきながらそれを放棄したように解呪しない。この二点について彼らは怒っていたのだ。

ナギは空牙に容赦なくクリムゾンクロウをかけられ悶絶し、悶絶した所で七夜の魔法が炸裂した。ちょうど彼の股間の真下に魔法の射手が。

タイミングと距離を少しでも間違えば、ナギの大事な部分は使いものにならなくなっていただろう。

こうしてナギは息子の前で二人に土下座する羽目になった。そして二人はナギにネギを自分達が鍛えると宣言。さすがの事態に固まったナギだったが、笑顔の二人に逆らえず、息子に「強く生きる…」と遠い目をしながら村から去っていった。

「英雄と呼ばれた父さんも実はただの人、って思い知りました」

「バグキャラだけどね」

「七夜師匠と空牙師匠以上のバグはいないと思います、僕」

「失礼な。それより、日本での修行についてだけど、ちゃんと準備はしてある？」

「一応思いつく限りの準備はしました。でも、調べれば調べるほど不安です。この年で教師って日本の法律違反になる気がします。僕、捕まりませんよね!？」

「あ……まあ、そのあたりは大丈夫じゃないかしら。空牙曰く、麻帆良は少々特殊な所らしいから」

「日本の関東魔法協会の長が運営してるんですよ。おじいちゃん」と知り合いらしいですけど」

「ええ。まあ、タカミチもいるしなんとかなるでしょ」

「タカミチに会うの久しぶりだな」

「私もよ、というよりネギには会うくせに私には会いに来ないってどういうことなのかしら。日本にいたらちゃんと話しつけないとね」

七夜の口元がにんまりと弧を描く。

「……僕、タカミチのお葬式をこんなに早く見たくないから手加減してあげてください」

ネギが言えるのはそれだけだった。

原作が始まりました（後書き）

別に空白の間の話が終わるまで置いておかなくてもいいことに、今さらながらに気付きました。と、いうわけで原作突入です。

最初から完全捏造ネギです。

麻帆良到着です

純白の手触りのよさそうなコートを身にまとい、片手にはトランクケース。目元に顔半分を覆うような大きめのサングラス。しかしそれでも怪しげな雰囲気はまったくなく、むしろ逆に存在感を増していた。隣に小さな子供を連れていた事もあるが。

「ここが麻帆良ね」

「今は確か冬休みでしたよね。僕ら早く来すぎちゃいました？」

「これくらいがちょうどいいわよ。こっちでいろいろと調整しなきゃいけないことも出てくるだろうし、受け持つ生徒たちの事を頭に叩き込む時間も必要でしょ」

「それもそうですね」

「それに、イギリスと日本じゃ気候が違うわ。あんたは人間なんだから、風土の変化で体調を崩す可能性もあるもの。短い期間だけど、体を慣らしておきなさい」

「はいっ」

元気よく返事をするネギの頭を七夜は優しく撫でた。ほのぼのと和んだ雰囲気の中、軽やかな声が二人にかかる。

「母様っ、ネギっ!」

「明日菜！」

色の違う瞳に喜びの色を浮かべ、ツインテールのオレンジの髪を揺らしながら明日菜　神威明日菜　は七夜に抱きついた。

「お久しぶりです、明日菜さん。相変わらずお綺麗ですね」

「ネギもその紳士な所は変わってないわね」

「本当のことを言っただけですよ？」

にこりと笑みを浮かべる明日菜に、ネギもにっこりと笑みを浮かべた。

明日菜は日本に来る時に神威明日菜として名を変えた。最後まで空牙か七夜の名字、どちらを使用するか迷った拳句にあみだくじで決めたという経緯がある。

「明日菜……」

「あ、木乃香置いてきちゃった」

後方から黒髪の美少女が肩で息をしながら駆けてくる。

「あら？　もしかして」

「え？」

「あなた詠春の娘さん？」

「父様を知ってるん？」

「昔ちよつとだけ、ね」

くすり、と笑いながらサングラスを外し、手を明日菜が木乃香と呼んだ少女へ向けて差しだした。

「初めまして。私は朱月七夜、明日菜の母親よ」

七夜の発言に木乃香の目が見開かれる。そしておずおずと手を差し出し、握手する。

「こないなに綺麗な人、初めて見た……」

「ありがとう」

木乃香の褒め言葉に七夜は、もう一度にっこりと微笑みを浮かべた。その後ろでネギと明日菜が小声でこそこそと話している。

「ああ、また七夜師匠の顔に騙される人が……」

「ネギ。それ、父様の前で言ったらクリムゾンクローよ」

「空牙師匠の前でそんな恐ろしいことは言えません。僕、まだ死にたくありません」

「そうね。父様のアレをくらって無事なのはバグキャラのナギくらいよ」

「バグの父さんとは一緒にされたくありませんから」

「何事もほどほどが一番ね」

「はい」

まだまだ子供といえる二人がどこか達観したような様子でいることに、周囲を通り過ぎる人々が不思議そうな視線を向けていた。

「そういえば明日菜さんたちが僕らのお迎えでいいんですか？」

「そうよ。確かタカミチも後で来るって言ってたけど、って来たわね」

メガネをかけた二十代後半くらいの男が引き攣らせた笑顔でこちらに向かってくるのが見えた。

「久しぶり、ネギくん」

「おひさしぶりです、タカミチ。半年振りぐらいですね。これからよろしく願います」

「麻帆良学園にようこそ。いい所でしょう？ ネギ先生？」

「本当にネギが先生やるのね……」

明日菜が顔を覆ってため息をつく。

「えー？ 新任の先生なん？」

「はい、それでは改めまして。この度この学校で英語の教師をやることになりました、ネギ・スプリングフィールドです」

ネギは頭を下げて、木乃香の顔を見上げる。

「無理して先生をつけて呼ばなくてもいいですよ？ 自分が子供だつてわかってますから」

「ええの？ じゃあ、ネギ君って呼ばせてもらうなー」

「はい。明日菜さんも今まで通りでいいですから」

「わかったわ。でも、先生だと思えるようになったらネギ先生って呼ぶわよ？ タカミチのことだつてちゃんと高畑先生って呼んでるし」

「うつつ……うれしいけど、なんだか距離が出来たようで複雑です……」

しょぼんと肩を落とすネギに明日菜がくすくすと笑った。笑顔を引き纏らせていた高畑も、その和やかな空気に顔をほころばせた所だったが、耳元に届いた声に再度顔を引き纏らせた。

「タ・カ・ミ・チ」

「ひいつ!?!」

するりと七夜は高畑の首に後ろから腕を絡める。その場に響いた高畑の素っ頓狂な声に三人の視線は彼らの方へ向き、七夜がしている行動にネギと明日菜は遠い目をし、木乃香は目を瞬かせていた。

「久しぶりねえ、タカミチ」

「は、はい。お久しぶりです、七夜さん」

「本当に、久しぶりだわ。前に会ったのは何年前かしら？」

「えーと……」

「半年前にネギに会いに来てたんですって？ 私も傍にいたのに、どうして私には顔を見せないで帰ったの？」

「そ、それは、その」

「まさか、私に会いたくなかったから、なんて言わないわよね？」

「ソナナコトアルワケナイジヤナイデスカー」

思い切りカタコトで棒読みの高畑とは違い、七夜の顔はにこにこ
と笑顔が輝いていた。同時に、彼女の腕がぎりぎり和高畑の首を絞
めているのもわかる。

「その辺にしておけ、七夜」

突如として響き渡る声。その声に七夜は高畑から腕を離し、声の
主のほうへ駆けて行って抱きついた。

「久しぶり、空牙っ！」

「ああ、久しぶりだな」

挨拶とばかりに、互いの頬に唇を落とし、微笑みあう。

「た、助かった……」

「だから言ったじゃないですか。七夜師匠に会っていかなくていいんですかーって」

「はははっ……後悔してるよ、本当に」

「そう思ってるなら、麻帆良にいる間は家にちよくちよく顔出せよ？」

「そうします……」

「七夜。いつまでもじゃれついてねーで学園長の所まで行って来い」

「もう少しだけ、ね？」

「……仕方ねーな」

空牙の首元に猫のようにすり寄り、じゃれついている。空牙の手もまた彼女の腰に回されており、空いている手は桜黄金の髪を弄ったり梳いたりしている。

「空牙、香水変えた？ 前と違う」

「暇つぶしに作った」

「ついに調香にまで手え出したのね……私にも作ってよ」

「んー？ でも、お前何も付けなくてもいい匂いするしなあ。コレ、俺好みだし変えてほしくねえんだけど」

今度は空牙が七夜の首元に顔を埋めて肌に鼻を寄せている。

「よくそう言うわよね、空牙って。自分じゃよくわからないけど」

「ああ。すげえ好きな匂い。っーわけで、香水は却下な」

「仕方ないわね」

「あのー、七夜さんに空牙さん。そろそろ学園長にネギ君を会わせないといけないのですが」

ナチュラルにいちやついている二人に耐えかねたのか、高畑が声をかけると七夜は満足げな笑みを浮かべて空牙から離れる。

「悪い、待たせたな。ネギも久しぶりだな、元気してたか」

「はい、お久しぶりです空牙師匠、つてええ!？」

空牙はひょいとネギの体を片手で抱き上げる。

「おー、重くなつたなあ」

「あ、あの恥ずかしいですよ空牙師匠っ」

「ガキはガキらしく甘えとけ」

「ちょっと意味が違うと思います……」

その後もネギは抵抗したが、虚しく学園長室まで空牙に抱きあげられたまま連れて行かれるのだった。

麻帆良到着です（後書き）

アスナも明日菜になりましたが、幼いころのままのクールさを残した子に育ちました。

そしてネギと明日菜は顔見知りです。

学園長と1対1対面です

高畑の案内で一行は学園長室へと向かう。

大きな木製の扉を叩き、入室の許可が出ると扉を開けた。そして見えたのはあるものにとてもよく似た人物。

「……空牙師匠。僕、昔見た日本の妖怪辞典でとてもよく似たのを見たことがあるんですが」

「確かに似てるが、ありや人間だ。この麻帆良の学園長で近衛近右衛門。その近衛木乃香嬢の祖父だよ」

「……似てないですね」

「……七夜、お前ネギの教育少し間違えたんじゃないかねえか？」

「意外性も付きものよ」

そこで学園長と呼ばれた近衛が咳払いをして意識を向けさせる。

「電話では何回か話したが、直接会うのはこれがはじめてじゃの。メルディアナの校長から聞いておるよ。麻帆良にようこそ、ネギ・スプリングフィールド君」

「あ、はい。はじめまして、近衛学園長。ネギ・スプリングフィー

ルドです。何分未熟ですので、ご指導、ご鞭撻のほどをお願い申し上げます。」

空牙の腕から降りたネギが、しっかりと頭を下げ、挨拶をする。その様子には七夜は満足げに笑みを浮かべる。

挨拶はしっかりと。

「ごめんなさいとありがとうは必ず。」

七夜がネギに対して口酸っぱく言い続けてきた最低限の礼儀。どの国でも万国共通、大人も子供も関係ないと言いながら徹底的に教え込んだ。

「うむ。しかし、いささか子供と思えぬ挨拶っぷりじゃな」

「七夜さん。今のネギ君の挨拶はどう考えても会社に入社した新入社員のようなのですが」

「似たようなものでしょう？ ネギは麻帆良に教師として来た、一社会人みたいなものじゃない。もっとも？ それが日本の法律から考えて普通とは思えないけど、ねえ？」

視線を流すと、近衛は彼女から僅かに視線を逸らす。

「ああ、それは僕も気になってました。いくらなんでも日本政府にあれこれ言われるのはごめんですし、いざとなったら切り捨てられるのも嫌です」

「ネ、ネギくん。それはないから大丈夫」

「それ、七夜師匠と空牙師匠の前で言い切れるんですか、タカミチ。絶対教員免許持ってなくても大学卒業してなくても、文科省から書類が回ってきたり、他の教職員からいじめられたり、PTAから苦情とか訴えられたりとかしないって」

「……………」

にっこりと笑顔で言うネギに、高畑はそつと視線を逸らした。

「……………ネギの奴、年々お前に似てくるな、七夜」

「私が誠心誠意込めて育て上げた子だもの。で、本当にネギは訴えられたりとかしないのね？」

「も、勿論じゃ。その辺はいろいろと根回しをして便宜を図っておるからの」

「それはよかった。それでネギが傷ついたら、うっかり暴れちゃうかもしれないもの」

彼女の人となりを知る者が聞いたらかなり物騒なことを言っているとわかる言葉を吐きながら、七夜は微笑むのだった。

「ところでネギ君には彼女はおるのか？ どーじゃな？ うちの孫娘なぞ」

「ややわ、じいちゃん」

ガスツ、と大きな音がして近衛の頭に金槌が突き刺さる。しかし

誰も気にすることはなく、近衛もそつと金槌を取って血を拭きとつた。

「それともう一つ。木乃香、明日菜ちゃん。ネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの」

「はい？」

「ウチは別にえーけど？」

「学園長、いくらなんでも女子寮に僕が入るのはまずいと思います。独身者用の職員寮とかはないのですか？」

「確かにタカミチ君が入っているような独身者用の職員寮はあるし、空き部屋もあることはあるんじやがのう。いくら先生といつても、十歳の君を独り暮らしさせるわけにはいかんじやる。タカミチ君は出張が多いから任せるわけにもいかんし、何より二人暮らしには狭いじゃろうからな」

「う、年齢を言われると……」

「というか、別に女子寮に入らなくても空牙の家に住めばいいじゃない。私もそこに住むし、通いでもいいのでしょっ？」

「そ、それはそうじやが」

「まさか、ネギを女子寮に住ませることで何かさせようなんて思っついてないわよね？」

紫の瞳を細め、獰猛な獣のような光を宿して問いかける。その答

え次第では直接手を出すことも厭わないといった感じだ。

「そうじゃな、ネギ君も師匠である朱月殿と神威殿がおる家の方がよかるう。よし、ではそのように手続きはしておこう」

あつさりと意見を切り替える近衛に、七夜はあとで話し合いが必要か、と脳裏の片隅で考えるのだった。

麻帆良の住宅街の一角。

三階建てのその建物の一階には看板がかかっており、看板にはこう書かれている。

『C a f e S e t t e N o t t e』

イタリア語で七つの夜を意味するその単語は、見る者が見ればどんな思いが込められているかわかる。事実、意味を聞いてきた常連客に空牙は、誰もが見惚れるほどの笑みを浮かべて意味を語り、客をある意味骨抜きにしたことがあった。これは隣で手伝いをしていた明日菜の言。

「へえ……普通に考えてもいい家だけど、中身は？」

「一定の条件下なら【屋敷】に繋がるようになってる。ネギの部屋はここ、で七夜の部屋はこっちだ」

三階に上がるとそれぞれ両側に部屋が配置されている。扉には部屋の主を示す小さなボードが下がっていた。

「あれ？ 明日菜さんの部屋もあるんですね」

「ああ。あいつは週末こっちに帰ってきて店を手伝ってくれてるんだ」

「僕も手伝った方がいいですか？」

「教師がバイトしちゃばいだろ。それに、お前にはやるべきことがあるだろ？」

「はい、すみません空牙師匠」

しよんぼりと肩を落とすネギに、空牙は苦笑して彼の髪の毛をかきまわすようにして撫でた。

「息抜きしなくなったら手伝いに来い。基本は先公やってな」

「はいっ！」

「よし。なら久々にネギに俺特製シチュー作ってやるから、ちゃんと明日の準備しておけよ」

「本当ですかっ！？ あ、あの、それじゃ僕デザートにお願いが…」

「なんだ？」

「七夜師匠のお手製チェリーパイが食べたいです！」

「OK。じゃあ、デザートはそれにしましょう」

「やった！ じゃあ僕急いで準備します」

顔を輝かせてトランクを持って部屋に入っていくネギを見送り、空牙と七夜は用意すべく階段を降りて行った。

数分後には片づけを終えたネギが降りてきて、同時に一時的に明日菜が帰宅。久しぶりの四人揃っての食卓に誰もが笑みを浮かべていた。

栄養がたくさん取れるようにと、細切れにした野菜をルーごと煮込み、さらにその上に野菜を盛ったシチュー。煮込み時間は短縮のため鍋自体の時間を早めた。その隣のスペースでは七夜が焼き上がったパイの上に煮詰めたダークチェリーを乗せている。本来ならダークチェリーの季節ではないのだが、彼らが【屋敷】と呼んでいる場所には古今東西問わずあらゆる食材が詰め込まれている【貯蔵庫】がある。これによって季節感土地柄無視の食材が手に入るのだ。

空牙はこれを大いに活用して店の運用に当たっていた。

出来あがったシチューもパイも全員が舌鼓を打ち、各々近況を語

り合う。七夜と空牙は繋がっているのです。その必要はほとんどないが、ネギと明日菜は明日菜の長期休みでしか会わず、ネギも自身の修行もあつたためきちんと会話するのは二年ぶりになる。

「それにしても、修行が日本での教師生活っていうのもおかしな話ね」

「僕もそう思います。一応師匠達のスパルタ教育で大卒程度の知識はあるつもりですけど、教職課程というものを取ったわけじゃないので、どういう風に教え接していけばいいのかが皆目見当もつかなくって」

「そうね……それ以前に子供が教師、なんて生徒たちに舐められるかもしれないものね」

「はい。麻帆良にいる魔法関係者ならいいでしょうが、一般教師はどう考えているかも不安です。いくら学園長が根回しをしたとしても、頭では納得しても心では納得してないでしょう」

「大丈夫よネギ。近衛学園長が断言したのよ。大丈夫、って」

「そうだけ、ネギ。もしそれで何かあつたら……な？」

「ね？」

「……お手柔らかに頼みます」

「麻帆良、壊さないでね」

互いに微笑みあう二人に、子供たち二人はそれしか言えないのだ

つ
た。

義妹と再会です

七夜はネギが連れてきた同行者に目を瞬かせた。

(……そういえばいたんだった。すっかり忘れてたわ……)

空白の時間を異世界で100年以上濃い時間を過ごしてきた七夜は、すっかり原作の状況を記憶の隅にやってしまっていたようだ。

しかし、それをまったく表に出さずにつこりと優しげな笑みを浮かべて腕を広げた。

「久しぶりね、キティ。いらっしやい」

「~~~~~っ、姉様っ!!」

ホップ・ステップ・ジャンプの要領で抱きついてくる義妹を、七夜は優しく受け止めその金色の髪を撫でる。

「会いたかった、会いたかった!」

「私も会いたかったわ。でも、会いに行けなくてごめんなさい」

子供のように泣きじゃくるエヴァンジェリンに、七夜の心は痛む。

「ぐすつ……兄様から、聞いていた。姉様は異世界に飛ばされてたつて。帰ってきてても、ナギの息子を鍛えてたから……」

「ええ。そう考えるとネギはキティの弟弟子に当たるのかもしれないわね」

「エヴァンジェリンさんが僕の姉弟子ですか？」

「ええ。キティに魔法を教えたのは私だもの。同じ真祖としてね」

「なるほど。それじゃ確かに僕の姉弟子ですね。よろしくお願いします、先輩！」

子供の無邪気な笑顔を浮かべるネギに、エヴァンジェリンは泣いたおかげで目元を真っ赤に染め、鼻で笑ってから再び七夜の胸元に顔を埋める。そしてちらりとネギに視線を送りながら言った。

「私の弟弟子なら後でどれくらいの力なのか見てやるっ」

「お願いしますっ」

「うんうん、弟子同士が仲がいいと私もうれしいわ。にしても、キティはよく私がここにすることがわかったわね」

「……その坊やから姉様の魔力の残滓がしたから、明日菜に聞いた。そしたら姉様が来ていると。居ても立ってもいれず、坊やに案内させた」

「そう……」

顔を擦り寄せるエヴァンジェリンは気位の高い猫のようで。動物愛護精神の高い七夜の目には、堪らなく可愛く映った。

その夜はエヴァンジェリンと、彼女の従者であるガイノイドの茶々丸を交えて夕食を取り、会えなかった間のことを報告し合う。

「あの馬鹿ナギがこんな魔法をかけさえしなければ……！ バグキヤラめ……！！」

「我が父ながら馬鹿なバグキャラですいません」

「いや、坊やが悪いわけじゃない。むしろあの馬鹿に似ず優秀で何よりだ。まあ、学園結界による魔力封印は兄様に解いてもらったのだが、登校地獄に関しては未だ解除方法が見つからない。兄様もそこまで甘やかしてはくれないからな」

「やってもいいんだけどよ、さすがにそこまでやると煩え奴らがいる。魔力封印に関しても、上層部はキティに封印がかかったままだと思ってるしな。そのあたり誤魔化してるし」

「空牙師匠、エヴァンジェリンさんにかかっている登校地獄ってどういふものなんですか？」

「簡単に言えば、学園外に出られない呪いだ。そのおかげでキティは中学生生活をループしてる。本当はそういう呪いじゃねえんだけど、ナギのあのバグっぷりが呪いにもバグを起こしたみてえでな。それでこいつの魔力が学園内の結界維持に使われていた」

「……僕、やっぱり父さんに会ったら一度殴ろうと思います」

むっ、と唇を尖らせ拗ねたような怒っているような表情を浮かべるネギに空牙は苦笑する。

「そうだな。会えた時のために、もう少し力を伸ばそうな」

「はい！」

ネギの頭を撫でる空牙を、エヴァンジェリンを抱く七夜も柔らかいまなざしで見守るように見ていた。

「それにしても、キティがネギの生徒ってことはクラスには他にも少し違う存在が多いのか？」

「少しどころじゃない。むしろ全員が異質と言ってもいい」

空牙の言葉に顔をあげたエヴァンジェリンが答える。その答えに空牙は視線を下に落としてネギを見ると、彼は一つ頷いてエヴァンジェリンの言葉を肯定する。

「やはり、麻帆良を全面信頼するのは危険なようね」

「今のところ問題はなかったが、俺達が揃うことで問題が起きるかもな」

「空牙師匠……」

「安心しろ。魔法世界がどう言っても、俺達がいる限りお前が不安に思うことはねえよ。そうだろ、七夜」

「当然よ。ネギ、あなたはこの朱月七夜と神威空牙の弟子。正々堂

々と顔を上げ、前を向いていればいいのよ。

「はい！」

元氣よく答えるネギに空牙は再度わしゃわしゃとネギの頭を撫でるのだった。

美味しいケーキとコーヒーを提供する『Cafe Sette Notte』はどちらかというと客の年齢層は高い。中高生よりも大学部並びに教師陣達のほうが常連となる確率が高い。理由としては、大学生以上の方が昼も時間の余裕が取れて訪れやすいこと、そして夜になるとカフェと名はついていてアルコールドリンクも出すバー形式にもなるので大体二十歳以上の者達が訪れることが多いのだ。

さらにはマスターである空牙の容姿端麗さも客を引き付ける魅力の一つとなっている。子持ちであるということも知れ渡っているが、そうとは見えない年齢不詳の美形という肩書が女性客の心を攫っている。そこへ極上の美女である七夜の登場は、空牙目当てで通っていた女性客からしてみれば肩を落とす出来事で店から遠のく者も多かったが、同時に彼女の作るケーキと入れる紅茶の虜になる者も多かった。アットホームさを心がけ、あまり席数の多くない店は人の少ない時間帯になるとほんの少しのサービスと無自覚の七夜の歌を聞く

ことが出来たりもする。

この日もちょうど一時的に客足が途切れた時間帯、店の中に誰もいない状態の時に七夜が不意に歌いだした。隣で空牙は文庫本を読みながら彼女の美声を堪能していたのだが、不意に歌声がやんで顔をあげる。

「どうした？」

「うーん……喫茶店といったら猫かなくて思ったら、猫科の使い魔が欲しくなったのよ。でも猫科の使い魔って言ったら何かしらって思って、出てきたのが かがんこくしゅんげい 火眼黒俊猊……」

「またマニアックな……猫科で代表的なのはスフィンクスじゃね？」

「顔が人間だから却下。あとは白虎とかも考えたんだけどねえ……
どっちがいい？」

「フェンもケルもオルも黒いから今度は白でもいいんじゃないの？
ああ、でも一匹だけ仲間はずれはなあ。どうせなら二匹ともゲツトしてこい」

「うい。ちょっとがんばって契約して来る」

「いってらー」

完全仕事放棄を宣言した七夜を咎めることなく逆に見送った空牙。

週末で忙しくなる前に手伝いに来た明日菜が、これでいいのか接客業と遠い目をしてしまったのは間違いではない。

義妹と再会です（後書き）

原作に突入したのはいいけど、オリ主目線側で書く原作のネタがほとんど使えないことに気がつきました……orz

と、いうわけで次回から一気に京都編予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0802s/>

ワールドトラベラーズ

2011年11月20日20時39分発行